

• 0 1 2 3 4 5 6 7  
• 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19  
JAPAN  
Tamm

一四一

ル4  
3496  
2

著作堂鶴旅漫錄

中



門ル3  
號3126  
卷2

門ル4  
號3496  
卷2



若作

堂囀旅漫錄

坤

昭和九年十月八日購求

著作堂  
藏書

著作堂  
藏書

著作堂羈旅漫游

下卷目錄

- 一 天狗神  
二 白川越の眺望  
三 商人店の目録  
四 小倉山  
五 かゝるのれの墓  
六 京布中の喪附はる  
七 女児の立小女  
八 女子の帽子  
九 粧田口陶器  
十 京めの人物  
十一 虚度の名人  
十二 京めの風景  
十三 淀川治水

- 一 京めの風景  
二 淀川治水

- 七 挿木町の懷古  
八 奴の小海へり  
九 西鶴の墓もと  
一 古庭をこねう墓  
二 千日寺の墳墓  
三 二代義をえう墓  
四 家隆の碑  
五 元和の年宮義士の墳  
六 思やうは  
七 大坂小三の所不破の評  
八 浪華の人物  
九 厚今文セラ佐馬  
十 西鶴石残の反  
十一 松門の施行  
十二 ち丈天井の傍り  
十三 能優術とされ  
十四 鈴波地  
十五 女子の評  
十六 守護の守  
十七 封印

ナセ テ奴くひのふがほ

ナ六 吾雀がす

ナ五 逃君

ナ十 加すよ

ナ三 委のりれのゆ

ナ三 京大坂高より平

ナ二 道比准の芝居

ナ三 はえの水泊

ナ一 伊佐波の若風呂

ナ三 山田の客舍

ナ四 伊豆はけのうゑ

ナ三 姥泡の堅ニ久

ナ二 奴女七ヶ原の交代

ナ二 右市の芝居

ナ一 世古の麻葉

ナ四 太平のゆ

ナ一 海賊四百の手跡

ナ三 兼角、画賛

ナ七 ドセ代の手跡

ナ九 伊勢のゆ草あ

ナ五 伊捨山

ナ十 東名のゆゑ

ナ二 東名の手曲

ナ三 東名・市中の長

ナ三 一目連

ナ三 伊豆はくり

ナ一 名ちきの十数枚

ナ三 箕川のむかひ故の西船

ナ二 おせ代の巻向塚

ナ二 クリムシのゆ

ナ三 おも底

ナ三 落塙山

ナ五 箱根東海守の谷

ナ三 賽の川原の水

九十七 幸村の不二男

九十八 名馬の足跡

九十九 振りの群集

一百 勇志の跋文

百一 箱中自戒十五ヶ條

百二 豆相と歴懷古

以上

トモセ山記

壬戌鶴張漫游下巻

三 戸 戰化者曲亭馬琴著

四 逃年京シテシナリ神と称すハ赤山明神と深妙大玉アリ

五 赤山ト巣山は麻葺き神域の主賓ニ町ノ御子御子上醍醐也

六 有ササキ年同姓之年也トナリ作めシ不祥件を鬼形の画幅ヘ

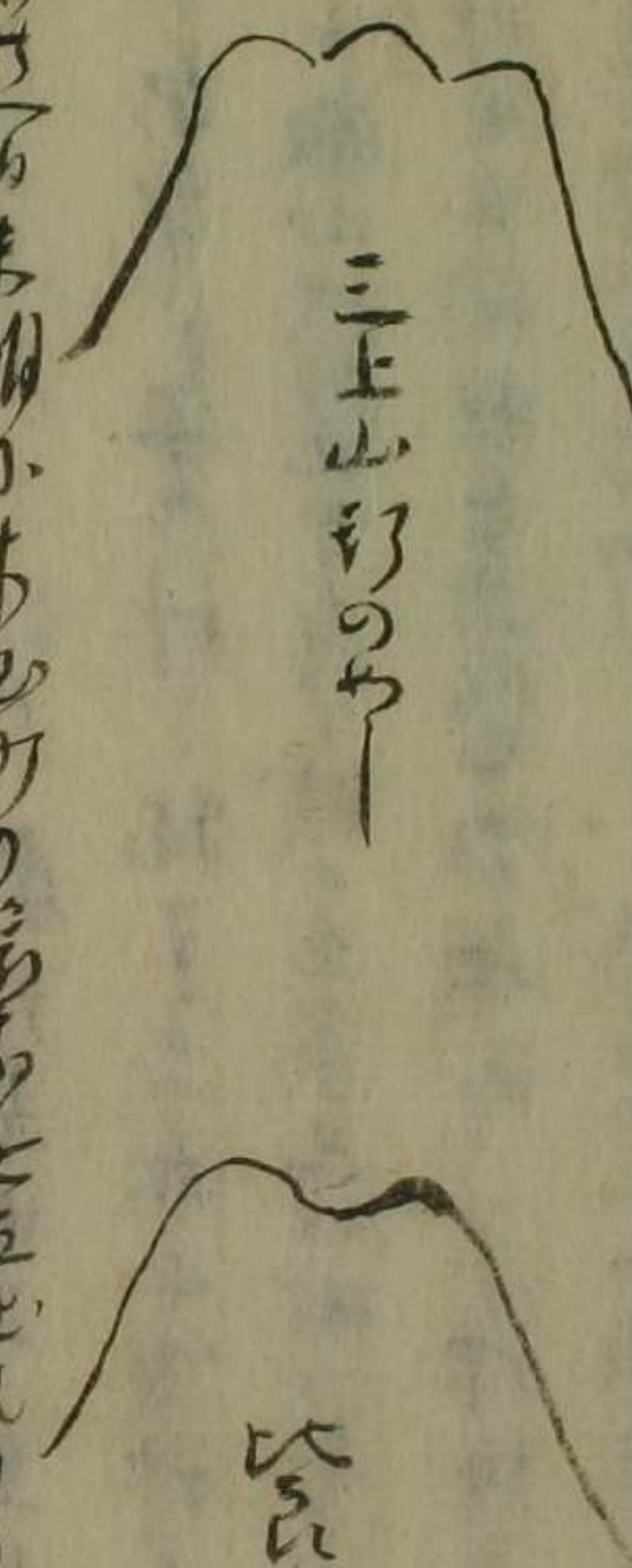
七 三十番神の主ツケアシノ底里シテ御座すシマサ内之拠地

八 あゆこあり

九 七月土石火金山少佐軍守相もまよひてあつき一本木本  
指のカーネル色つゝとヤレヨモリて足小つ手毛ノニに

えひそし所ノ失ひぬひておひの神社古跡を反人も色と云

三上山記



せりて、事の少なかれの筋とさせてしまひにまじ  
ひまつたものかとね（は川鍬）  
峰をもとづくに

比  
較  
的  
學  
科

湖水と眺め  
白川の山中をくわでると切生え  
世のうの白川石をくわ

八百十日をスムカヒのりう

三  
卷

うのひのひへとひもひは凡三千里半  
る軒ミサキの太タガを抱ハグあつ木キのよヒメゆん丸マツ小コトコト生リれ毛モ又アフ下シ  
の名本室に一奇絶キエツと云ス。

は、曰辛未の夜までアリーハ内閣之秀桂之助之門

うねに生き残る  
一ノ木の沙汰の事より志望の海向

久の間もせむぞうりんは長輔よ又佐ら是モ又佐今乃  
うち改め鶴の諸侯某氏社ノモトシと云ふねのうづの名古屋  
アモイと改めて年12歳半の松原義氏すと云ふ故を築生  
すりはくことよりひびき代りへ申して御紀し

の布西向小章波引手の社有りは或人の曰本ノ役毛く北

是より嘗て山王一坊の隣りとすと秋草山を歩ひりあ  
る。家に依て辛波が遙小山王は降社と定む。あふやを之を守  
る。かうと山へ二里またやまとけられずして京へかえりぬ  
る。京へかづかわれ、必ず子供に書きて借宿をされを察  
し、ほせ重ねずそむきのあくまきのまきにがむとり、  
のれどもよしと不知

もまほしのうのや

五

家業計地僧王寺の住持公は豈むかく或を少ろ度キモニテ不思  
意妻ひまく又ウヘ、るる薄す三人か四人居するもアモ密件と  
夫年らり、山下の鳴啼え世のあく荒代ハ詔ミカサト族人  
少モ性無、狂と突せ、其は詔と極の事と、少モの私ミシイヨ  
行のや、モ這入に小行院と云ふて、もみ詔ゆも風ミシイヨ也、  
樹り地へよて、系ハ即りれと入界主多タ一乞土地、肩カツ  
又質を少モ賤廉と樹て、利が某配とは、されど、質を少モ  
口うけの口角の木と胡杆カスガにて、白く即り、是ては、自ト  
あり味方公、セウムとギー、は少ハ松の事と、はらず、も、  
セウムのふとま浅取人マツタケノヒトとトケて樹

六

京シヤモ申小き形ト、正夫賤廉と樹るしに、戸みて廉と、  
日ちるね、アリよハ喪服の色を、ハ廉小便ミナリ、列小中と  
少れあ、一正夫賤廉と、り、色ハ人うきい喪の事と、ありて  
狹小入あ、又名ちを、小て市中の奉仕信部と、禁ざる  
依て、早に、白布と、しよくはん少、ハ信部立派アリ、信と昇  
ものに、も、まじ、悉く社朴と、あれ、是少小儀の天蓋ミタケ、幡等  
と、して、麻上不、する人見と、ねて、けあらま、入ドク、を射と、  
ら、一正夫、又、人、信の先を立ちて、と、日本、オホトコ  
きもの、ウジバシの、ふくら山と、又、土地の風俗を、アヌ大

は、捨桶も皆すらのまことに白木にて造るゝ事多く、  
積料少て猪り用や鹿毛ハ自陳清美隊の社朴とぞいそ  
へまよれ

伏見の梶山とぞいそ

名のとく牛のみにて行山也

馬琴

七 京のあくゝ廻のまに小は捨桶ありて少しでもへりて向ふ  
かう様とまうりらぢ尾とらへして立て立てまづ小はまたに富  
みのせらとも小は巻く立てたてまづ但一坐候ゆす  
えはく経と用うるか一ねすのこぬとあらばとおほひり  
たり其捨桶と月小六廿夜、近生の農人渴小あるしあが

善にあは小は捨桶をさむちりとおなき業室もの景致より  
交易してりし又入の者ハ虚席者とて雜あく者に似ま  
る有京の町と農人捨桶ふるを入てあひかづに聚と小便セ  
小便不と小便を小人根さんぢんとおほやうとありくこそと  
呼びてつ角のホト交易する小便とろくさんと捨桶■へ居  
風呂の湯り湯など加減一五々農人へ又とく目利一と  
文易と申ゆてどもふか堪て手のうへり又や町筋所ふ根  
元は遠のたる人世のあと津てあくを小便捨桶とおく坐  
主に依て男よハの併供あらへおら傳す。すな湯の捨桶  
へ立てて尾のものもとむて小便またえ小耻るをまくええひ

浅より人か一ト珍ハ止むとテうに一ト中一居る

八 あち坂は豊かてすみ他(止)付きるべ帽ふと主ぐの帽  
みの取らむナトシムモリ サキナホアホ あち坂の佛帽ふと法衣  
モミタナカの化也のナーノ サキナホ 布らかハ縮となり肥のあみて  
瑞ぶよくえ告一主事ニテ止のすと佛衣帽ふと止の奉  
毛の帽よたすき紫或玉りも主の同僚し凡ダモの帽よ  
とはすくまゆのナーノ送用や サクマ ナシトモシ戸のすと  
の素面少し他(止)するを逸かせむ

九 京の陶ハ栗田口ありとろーくに水波々光りに川陽  
小な風亭と不床あり坂蕪蒹葭堂好ニの銀炉急流

十 ふと製ひ今一引旭昇ると不床有字ひの重あつ店てをくく  
萬葉と製ひせ引若もと一きぬのこゑ

亨子て今の人わと皆川文彦と上田達作の三餘歌ハ法モの  
人じあに傍若どうせ走り文彦ハ逆行ウタウナリにやあが  
成させといどよとへと海舟ノビ海舟ハ左へも右ぬ画う月  
溪と雅樂 カ のこ庭も直筆のあよしとじ一ちゆう  
文は今人わお一品が一じべえものと蒹葭堂のこ  
とすりあそぶも

風さくさく吹け林根とちと戸と山代小鳥と山代翁

枯成

五  
七  
九  
十一  
十三

卷之三

くほのゆえのねも望むべからずと  
章言更に後こう

韓信が市人の股とくろを書いた

未まに小海と多良谷水もアレ、アレのトドけ  
サキサキあらぬかりともいえ、アリ洋芋サクダの白芋、はるか事ひ  
タニ学丹が奇少でも、ホの事■のトアレアリと云下の句と  
タニトアレ、与削アリスカシ

タニ古宣長ニメの守の内定あらの守と部して曰えさせ、  
元もヒミジモサフリケトウソヒヤキのち油をすり、  
モクスミヒバ充モヒモラモウカハははのセノモレリタヌヒ

あつた。徳とてまほ達のこと上の句にゆきま  
しんひも手て金ひ毛てけよて堂一ぬ

あつた。ひよ浦とうまゆ道のことを前にゆきまとて坂群登  
しんりもとを坐して今ひもてけふて坐つて  
竹林支法<sup>え竹不立人日向か</sup>もふ人虚候として候人と見へ  
じき年七百<sup>え年も倉小行</sup>もく歳の迷根と時人五に重躍、  
きて群集あつて度七千人<sup>もの</sup>とあやめく者ありうち重か  
せ法すらこそ又法友人のもとへ行て詣て曰る槐<sup>エシジマ</sup>か通ある者有  
あり、ひて喧嘩の事とゆく。其けうち一者僅<sup>シテ</sup>かくも  
是美徳<sup>カタ</sup>もしく不<sup>シ</sup>久<sup>シ</sup>もからず幸<sup>シ</sup>と云ひ<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>一此法  
の主<sup>シ</sup>は法主實<sup>シ</sup>とあらずとも<sup>シ</sup>人少<sup>シ</sup>也  
也ハシ吟咏の法序と字に無はく若実に世人かと見え

皆地倒氏又布附文以友人と海上て曰時ハ行幸一也上詩  
辛亥正月某日是令初有僕も又虛設の令切つとまへよ  
者午時どりるのくわせきて社も、事ひ一ひびと便く切  
してゆくぬ友人かもらく文以虚設の令切にハ行と振省  
行とうかすんすんハ行一と之の翌日午時かはせて彼  
あ小山をとて多内とよ十内室をもとて曰文以ハ行  
地りうと虎皆地倒寺より是野村定雄の傍し文以今もと  
之食不あり

十三

或人丸山馬をも國松の画とみのうと直參はせよせ猪乃  
附たとえびと河小室と東十郎とおと八郎不を鷹巣

井と縣とれと道不あに生入れ直參はせよせ猪乃  
松乃附ちとえびとや壁と音で山中に一と帰ふととえびと  
学日汝が三種て附たとえびと年々通に御セヨ馬くまひ  
ベーとはくと泥り拂り出れて一月しきり少一とたはくあり  
一とくに馬の毛附たて竹叢の中に歸れなほそとえび  
大ふ收び走てあにあすと想まふと告ぬ学日汝先生ゆ  
ベー必驚れとぞとぞと呼うりひとぬ学日汝先生と  
お一人一五年ととぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
の中小助はるはると様と様と字一と字一と字一と字一  
字にひそと字と字と字と字と字と字と字と字と字と字

まうあに太原よりあたるてあらはるあはれしもふり  
白雲をうけた跡林の事とよまよが向て曰は跡林の跡す  
えたりとあらはるて山中もふととくとむろの細画する  
跡林として前にひきとて日せ画づら跡熟次すもや  
やえへて日せ画づらとくとむろ是跡林小ちびて跡林  
と手筆て向よひとくとむろ是跡林小や跡言くル  
跡林の裏中に眠るやに至る情すとつもしモ契喰  
わのほり猿若鳥り櫻山中かね林とくと半りにまた  
畫のやまとよしと快て跡林の各件ともばね  
翁又妻く語りさうてゆり無対にれてまか面と捨て

五  
丘云跡林と画すが小工玉子と翁がに傳ふまう四五  
八流のた降りて四名を名をそむかの跡林の事と向した  
管白性一もア波跡林ハシの里ケ森の中が跡林  
半身翁にてよく翁の漫足と感一キリヒト迹て翁  
半身翁にてよく翁の漫足と感一キリヒト迹て翁  
と翁小えもアし翁て翁又來まうと是を每画すが不の跡林  
と翁小えもアし翁て翁て曰を真の跡林とて翁の画つ  
あと角一子のや一嘯風亭或人曰此のやくのま  
と翁あと画す跡林の事とてもと大原のたまうを  
一レ翁画とて日是盲馬をと身と同ふえりいんと

筋毛くらゆるの生毛とアソンとすばハ必目と聞キテ  
の首といひて矢んるといひてねあこせるあ中へ鼻<sup>ノ</sup>と入  
クアラ眼<sup>ノ</sup>とスヒトキシ画たりと盲るにあハビーと  
リテヤヌマシケル角<sup>ノ</sup>ハシと感嘆<sup>ノ</sup>トモトヘ柳<sup>ノ</sup>サ翁<sup>ノ</sup>トモハ五古  
ヤサ又少モ幼の者<sup>ノ</sup>アモムモテシヤツ風<sup>ノ</sup>來<sup>ノ</sup>シテ<sup>ノ</sup>モハ五古  
とも山<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>とつて其子<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>又<sup>ノ</sup>多<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>と学<sup>ノ</sup>び今画<sup>ノ</sup>  
小草<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>祖父<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>少<sup>ノ</sup>劣<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>ハ福<sup>ノ</sup>辟<sup>シ</sup>

**古**瓦京師の文人見藏是<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>字也<sup>ハ</sup>多<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>  
仰<sup>ノ</sup>のみ<sup>ハ</sup>字<sup>ノ</sup>種<sup>ノ</sup>と稱<sup>シ</sup>も<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>流<sup>シ</sup>治<sup>ス</sup>るに三<sup>ノ</sup>の内<sup>ノ</sup>  
ニツハ耳<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>多<sup>シ</sup>タチ<sup>カタ</sup>多<sup>シ</sup>次<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>ほ<sup>ノ</sup>リ<sup>ノ</sup>ヤ<sup>ト</sup>

城<sup>ノ</sup>象<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>也<sup>ハ</sup>甚<sup>一</sup>も土地接<sup>シ</sup>太<sup>ノ</sup>傷<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>少<sup>シ</sup>う<sup>ト</sup>て<sup>シ</sup>夫人<sup>ノ</sup>波<sup>シ</sup>  
多くハ猪<sup>ノ</sup>藏<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>間<sup>ノ</sup>放<sup>シ</sup>萬<sup>ノ</sup>足<sup>ノ</sup>也<sup>ハ</sup>他<sup>ノ</sup>癖<sup>ノ</sup>ニ<sup>シ</sup>京<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>が<sup>シ</sup>  
以<sup>ハ</sup>に滑<sup>シ</sup>彗<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>半<sup>ノ</sup>巻<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>者<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>自然<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>碩<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>年<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>ハ胸<sup>ノ</sup>  
と<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>宣<sup>シ</sup>宣<sup>シ</sup>色<sup>ノ</sup>蕉<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>喬<sup>ノ</sup>麦<sup>ノ</sup>附<sup>シ</sup>落<sup>シ</sup>京<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>也<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>レ  
トリエ<sup>シ</sup>

京<sup>ノ</sup>から<sup>シ</sup>一<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>多<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>人の<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>考<sup>ハ</sup>る  
た<sup>シ</sup>む<sup>カ</sup>ト<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>一<sup>シ</sup>や枯<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>人の<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>  
う<sup>シ</sup>妙<sup>ノ</sup>せ<sup>イ</sup>ビ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>一<sup>シ</sup>や枯<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>人の<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>  
迎<sup>シ</sup>キ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>制<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>も<sup>ト</sup>低<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>落<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>奥<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>下<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>中<sup>シ</sup>

戸の障陰をくみべへば

テハ筋者ナシ。絵筆をあわす事。奇故の事と書きそよ。

贊ともちどひ書てきよ。

かくまし生の板挺かうと取の散る時もねむ

テハ自既トモももハ揚代ニ四十もよりの絵秀ニキトモ

毛ツ毛ミ毛ホテモ三十乃六ツアリ。多六ツまでハ毛十

ひじねも又曰

京とあらゆる所

法共小笠原の道小笠原のすみやまのちよ君 河毛

学て減くさむすむにまひは小君と云ふ 玄空

京にて又ナリトハ内相尚の隕

松口は本三、アラカニ、一休ナニ

佛々はとぞ祖師を拂とぞ走世の傍々祖師とぞ

ハ五尺のまとまく一切產生の塊也とすくふ色界先  
智色即足室 室室界足也仰ハ毛ナリモトムヒの色く凡ケアリ  
空即足色也  
一卷本書留  
まほはく  
讀二アモル

サキハ能人のもとあひとぞくくまがる。益

十六

廿日廿四時と申是トキ時はえどう時未だ時も下る  
いつやま西日は今夜からと時じちぬつたるとうせ乃連中  
のるて水力浦と云て駿勢となり淀ハ備毛あとの促崩

きて今まへねとすちと運び善に従の体の海ハ空  
除まじゆはきもととくの淀橋をぬる流失して橋村  
ニトモテ廻るみり車も経きてとみゆき少する御の跡  
又のやつ不收もと山もむくあら點地ヒタチ小に和のう  
捉大か切とてあ突はー南平時ハシナリ東ハ約巖の蘿  
及ひ西岸深小里ハシナリ小瀬は連う一西湖をあら院小點地  
山の小屋は道川もく海ハシナリ水ハシナリ小水也近く今  
小かくて濁水を余させのじら水ある時樓を塗と没  
樹木株とほれ村民或も丘陵ハシナリ又ハ從上小集るてち悪  
渋水かれて児女郎天ハシナリ天小遍ハシナリ日かみ四小標ハシナリ

中、かと仰へたのちもとありと切ちうえ大木が攀  
登きとくの傍様ハシナリとくふりもありス切兒と畚の  
中入樹のねぐらハシナリ其處ハシナリもくすい少救ハシナリとて  
一命と令つもろ者十の内三少しひ易かれて命を失  
うれねねナ波ハシナリとこそとおキ收ハシナリしとよどしおのの  
多原暴漲ハシナリあはせふもりとー安府ハシナリ主様の側  
小舟するの小舟とひり既の難劇ハシナリおサホハシナリと題す  
遇てあと生ひ一志民と入るよとよ集まる中に千金人所  
倉庫と発してそに資糧とトーリ又はもの富商等  
も又貯販と出でそと小施りんあ小うじ大坂ハ野馬

色ハか床上に及び天風て神様のみりや移換す  
吉二十日斗ミテて久印クシマ減じもつ風ヒラフに田地へ  
村すまと耕ハシロ入り之入て田畠ヒタチより水の中  
少ありぬゆ碑ヒゲ散乱ハラスして畔ハマす里リノビ點ヒツ吹ブフたりね十  
け堤ハマの上アベに行ハシて行ハシて庭マチとある所カタ傳ハシメふる高タカ  
湧き立ハシメ石イシ人ヒトあめのうきねはます若ヒトれ  
ナニ良事ヨシモノのうきれ少ハラスお持ハサム來ハシメリ柳ヤシマとねの中ハタケ收入ハシメし食エサシと  
れい酒ヨクとも小其客ヒトクモク佐人サジン少ハラス流客リュウキ各オハシ共ハシメて  
神カミとう多ハラスり酒ヨクと呑ハシメ柳ヤシマが投入ハシメて是ハシメと爲ハシメす二者ツバツの下アベに  
に仰ハシメて是ハシメと爲ハシメ者ツバツ一ヒナねナ波ハシメり

九十九度の波に  
波打つ入江にて  
御見聞改め碑一石に  
黒字で御之御みにて  
往来の取扱いに従う牧方のアラ木  
水の水<sup>トトロ</sup>を含むも御み日は紫信<sup>シナヒテ</sup>點<sup>シナヒテ</sup>叶<sup>シナヒテ</sup>ハ御み小豆て水又  
まくは三<sup>ミ</sup>人<sup>ミ</sup>在<sup>ミ</sup>小舟人<sup>ミ</sup>中<sup>ミ</sup>に入<sup>ミ</sup>て船<sup>ミ</sup>を押<sup>ミ</sup>れ漁人<sup>ミ</sup>も力<sup>ミ</sup>有<sup>ミ</sup>ものも  
只<sup>ミ</sup>小<sup>ミ</sup>舟<sup>ミ</sup>入<sup>ミ</sup>て空<sup>ミ</sup>の舟<sup>ミ</sup>と被<sup>ミ</sup>蓋<sup>ミ</sup>

大津曰其水の一件美に立ち今まやるの事多矣  
男大魚廿年二月上京して是倉の学舎小島既にて華中  
も同間に京宣明師、翻譯小島て温川博識もまたをつて  
太魚、近來一宦相师の侍者と云々一畏倍字一臥て七月  
和歌著尾古之小魚也一追迹あくまで翌年の年乃其

戸小治モリヒチモハカハ生テ大志信貴山葛体山等ヘヤト  
又京淀堤下切崩れて幅凡三里余長サ松ナリ下渺く  
ト一洲の如く森林の梢ウソの中より出ケルハ水中の  
浮舟の如く見る牛鷺大猫或千疋一千疋<sup>ホ</sup>ウに負級  
トヨミタニ<sup>サラサ</sup>立年序奉リて右とまにて落<sup>シ</sup>

牧方の川中下シ小舟ハ棹至<sup>リ</sup>答<sup>ス</sup>水<sup>ノ</sup>瀬食<sup>シ</sup>田栗  
トソシ<sup>シ</sup>酒<sup>ヲ</sup>ソシ<sup>シ</sup>ソ<sup>シ</sup>もとと<sup>シ</sup>今ハシ<sup>ト</sup>トモハハ  
罵<sup>ハ</sup>せ迄<sup>マ</sup>て云<sup>ハ</sup>治<sup>シ</sup>モサ鄙成<sup>ス</sup>シ

十七 久人塙本町の久塙今<sup>ハ</sup>太小妻<sup>ヘ</sup>て廊<sup>ミテ</sup>あ某室<sup>ミ</sup>ト<sup>カ</sup>モト  
音鳥坐<sup>リ</sup>ひ奴<sup>ハ</sup>橋<sup>ニ</sup>一<sup>レ</sup>の<sup>ア</sup>モ<sup>ト</sup>そ<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>ーの<sup>ア</sup>は<sup>ハ</sup>ト<sup>カ</sup>モト

さと<sup>シ</sup>と塙<sup>ハ</sup>久<sup>シ</sup>の<sup>ア</sup>は<sup>シ</sup>跡<sup>ト</sup>ス<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>の<sup>ア</sup>久<sup>シ</sup>塙<sup>本</sup>町<sup>の</sup>姑<sup>楊</sup>小<sup>シ</sup>義士<sup>ア</sup>み<sup>ト</sup>  
手<sup>ハ</sup>ナ<sup>シ</sup>て出<sup>ハ</sup>シ<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>人<sup>ハ</sup>少<sup>シ</sup>た<sup>ハ</sup>シ<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>ア<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>  
リ<sup>シ</sup>塙<sup>本</sup>町<sup>の</sup>行<sup>ハ</sup>シ<sup>シ</sup>で甚<sup>ハ</sup>キ<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>の<sup>ア</sup>は<sup>シ</sup>楊<sup>モ</sup>今<sup>ハ</sup>い<sup>フ</sup>ト<sup>シ</sup>行<sup>ハ</sup>  
ん<sup>ハ</sup>乙<sup>ハ</sup>少<sup>シ</sup>人<sup>ハ</sup>少<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>ア<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>は<sup>シ</sup>寧<sup>ハ</sup>シ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>れ相<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>  
奇<sup>ハ</sup>木<sup>ト</sup>ア<sup>シ</sup>木<sup>ト</sup>家<sup>ト</sup>ア<sup>シ</sup>木<sup>ト</sup>の<sup>ア</sup>三<sup>シ</sup>葉<sup>ア</sup>モ<sup>ト</sup>き<sup>シ</sup>世<sup>上</sup>の<sup>ア</sup>無<sup>シ</sup>  
是<sup>ハ</sup>得<sup>ハ</sup>シ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>勢<sup>ハ</sup>少<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>ほ<sup>シ</sup>篠<sup>中</sup>の<sup>ア</sup>感<sup>概</sup>又<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>

十八 久人塙本町<sup>書肆</sup>ハ文字をハシ<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>世人<sup>ニ</sup>ニ<sup>シ</sup>ケ<sup>ル</sup>トコロ<sup>今</sup>ハ<sup>シ</sup>シ<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>リ<sup>テ</sup>  
既<sup>ニ</sup>四代近<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>テ大<sup>シ</sup>法安堂寺町<sup>住ス</sup>テ<sup>客中</sup>ソ<sup>シ</sup>象<sup>ヲ</sup>荷<sup>テ</sup>自<sup>由</sup>向<sup>ヘ</sup>ト<sup>モ</sup>  
て<sup>シ</sup>ろ<sup>ク</sup>戯<sup>作</sup>ト<sup>シ</sup>自<sup>由</sup>化<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>出<sup>ハ</sup>シ<sup>シ</sup>モ<sup>ト</sup>自<sup>由</sup>ト<sup>シ</sup>

洋士<sup>ラス</sup>不<sup>シ</sup>久人塙本町<sup>少<sup>シ</sup>人<sup>ハ</sup>能<sup>シ</sup>者<sup>ア</sup>モ<sup>ト</sup>名<sup>ト</sup>シ</sup>

またまう其頃、アラリのりも又自天作と云ひて、エキリ尔尔自天  
にもの美小自天作ハモトベ自天、戯化尔と出来ば人ふ  
あひてのはハ文字やおどりて業也とちよく射利の作  
人なりには例とみては者のは判記、今も行自天作と云ふを  
アヌスの傍人カタヒトりる事、サルのをひそ京御楊大坂の惠櫻庄  
え京の人カナヅチの源平曰其頃ハジカニヤウミヨシテ肥はる源大坂の惠櫻庄  
小賞アラシちもて家々ありせ其頃考学ゆりて戯化と云ふを  
室と自天小の天自天作と云ふを極きを云ふナ人世  
行是自定利と財も生焉アシタク其頃も密小源海一見又名  
利ともとしらう物や有と人ほ小自天其頃考作のちもし或

少してぬ一きよがまほは直りて自天其頃ハジカニ執不處ハシマツ依て  
其頃アラシの子に江波を布すをつ実名の名と申ばりてまた書林と  
こせて其頃、自作の事は多く形アリ小ふ不なの人小て其頃  
二体アリてぬ一、ナハ内ナハシにうきびにて人小波と云うりし  
其頃がナハシニサリタルレシキノ名自天ガ石ニ玉ルヲアタケヌ豈不幸ニマラスマロ今カニ  
タレナリ或人ニ自天其頃トナフキリテ後ウ而顕トイフ人トナフシテノ者也セトニ  
二体アリ人、生字小字アラシ、人アラシて其頃アラシかどづけ不らばせ  
南嶺アラシ生在庭小戯作とて自天作とてぬと云ふ體  
のろじ又自天もカタキヌメあり戯作の生來四トク人小々に  
うじ其頃と應交アラシて後ハ自天アラシばし書一、島主と  
たゞ、諸方の会力アラシて自生する名アラシ人アラシ人アラシ人アラシ

馬足白毛も毛一色也山頂の其頭をもがく處少  
ありて不流ハ五頭一今も南領ひと毛毛と毛  
こうに毛毛あ毛と中毛其塊二六八ルカサリ自天門戲作ハ都  
原赤ノ西鶴ラ学アリ油三味綿上云母子ハ色  
舞馬ト棠大門毛長者持端袋上云三部  
冊子ラ翻案ニテ作レリシテノノ戲作中曲三味  
綿もヨレシノ字、仰ハ生未不生見アリ  
考人アリ尔乃之佛経との如ナリと批シ又入今ハ殊之他

人少講少や字いこゆまくはなをせんみえてか  
大津洋曰自天其頑南山鷦のそ人ハまくにれに戲じ事之科  
トテ事に仰者と業するる名ハ者也其事にりてゆく秘学の  
切骨て文も多きやとニニ事に生るやにたるよまゆかちもと  
又紀述ナ一叶美術の精粹と歴史博識の人のゆきと有モ

ては、いざるとも、傍しまく、まじめに、人を年も、かくと、もし、  
りありも、むね寄ぬ、めあがめ、仕事も、すうも、あたはせたり、さとす、けの風景  
にて、疑学す、まことにものんびり、じとも、ひとゆきつゆ、通す。ハ地圖す  
よし、大坂より、品川へ、し、つ、え、と、内うちも、櫻の、み、ま、く、一、き、二、樹、尾、し  
よし、よし、よしとい、こ、れ、か、わ、と、不、吉、也、園、の、こ、毎、日、か、く  
ち、日、序、よし、紹、多、く、も、京、都、布、人、も、亂、三、す、ば、ゆ、櫻、の、や、ま  
つ、ど、い、春、空、と、庭、見、一、記、括、除、は、一、そ、と、す、り、家、そ、と、ひ、は  
や、す、し、は、え、ね、は、戯、化、の、く、と、ね、浮、す、今、の、戯、化、者、者、を、毫  
の、毫、と、浮、す、もの、す、した、ぼ、と、具、碑、と、わ、南、碑、と、ケ、ト  
エ、自、天、と、ケ、テ、ウ、ヘ、の、戯、化、者、又、ち、の、や、一、ま、名、モ、せ、の、者、の

すいしよをうそほ小豆

基

父家を自天を原ればてあら氏へ自天のまに原  
そり今へあつはりては代自天ハ延喜二年五月土日先年五  
と頬後もすりへ後今へあつはりせ候而安堂ナレトテおほに  
かする事一にえの子供ナレトテあふ年はゆきて自天がほに年とあは  
ゆにあにいはくもととくと不當付自天が延喜モ日本火難ニラセテ今は若評判記へハ  
あつ自化して戸内をハ町のち楊氏ナレトテえりえ相自天ナレトテお  
れひのまつりをつる名ふたり■一ノ所不候以そりえ相自天  
もす帰ナレトテり自天と称すのいをいえりへうの分の  
ハ年六十有余ふえの是又戲作字のあはる人ゆふらす

あまきも山中付の役者ほ判記ハ自化ふれと不宣多代近年  
ほ判記の裏トリシタマキとふまこととくふえ相自天フ役者  
算合も

十九 奴の小えんへ生るとゆれとく三の氏へ元々うらとあまと早一郎  
は村小房古にせらよハ太は長年あはれとく裏ふのじまする  
へうも風洞穴あそびにかの庫カニワりふくさりの巣スズメノミ白サホシモ元少  
えうとむて跡カニワと不就は人のほ小日世申す捨セ八年のけり  
あふふふ鳥のいそとくあうてこがる車上男かにとくの處不男  
かうひうといひ一とを申入候余あうて入まとうとくの跡

よしの牛久大ひ中とはまことにかよとゆうと小白林と號  
異形のがむらに坐あちて鳥をさゝとし是其男子に心と効きをも  
あらし處小ゆたが前の事一日ハ類があり又一日額小くやか々鼻乃  
上小くりまことして世人やははと見る一あり行はれしるの堂ま  
の社友伝へ一太役小井てあつゝと枝脚一と男めづけ小  
て翁は付地の造小竹の並わくをしてゐのへそりほりの男ま  
小モふる有り也、ゆきぬをもうえやくい男にな  
焉、モハ思堂されの果といふのはとひの半有せ者大坂小  
かくき居ると誰も有りもとひば翁小卯里恭左名卯里は美すと  
にゆれとらひて彼思堂とさうじゆに宿かく做思堂と

うして翁府小まきりのひはくり生居仰云小奴の小まんと化  
アトよしめアガがまるものに中たがこそう男と卯里左名アト  
にうへるかへといえり

按左名卯里

恭

の年代りもとひまとハ文禄年月大坂小奴の  
少まんと不女役ちりとどと混れてひあづくらまへます保七

年小生也享和二年かえて七十又九とて

八日すニ取役村小まば承りてらまにと清よゆえ破り山の口  
鳥鷹田はい川日村の駿河の陳田民小竹て渴と云ふて牛は少  
ありつゝがむとくのとへのはまたソトとあるともはの苦提  
やふ寺附一組は村少り人のあふ偶合とつとも當にきの

少とふりて海田氏人とくらせんべくかしてあはば你ちの四  
ノリ年七十写年と元也既小衣著すといどもむらすの餘は  
えせも行動搖りすこすまやうべ一件世とくすうめあくとて人書  
とのせうども拂ふくいテ對酒して扇面とそしに中門  
うけひきて行一篇■うな匂とと書きとものと称を貢事

金城春色映丹霞、活氣和風到萬家。遺笑、宴坐す  
樓上、良、捲簾先見園中花。

右早春

二好氏媛  
山茶草

因庵てね夙夜にゆすまふ 小丁

山茶

詩も山茶草とあそ、自作と云ひて後がのはう伎風ありて

ううふた風うと咲るものと酒客と描うりと山茶のモリ  
はあくことあらる前年幕殿堂ううの風景■のゆにせふ  
まに画一つ幕殿ううしに題書す幕殿堂秋の風うして今が  
うち秋小有う山茶の画して文多もど画をよく人の寫小道ぞ  
大なる人もキ名のゆにとくとくじたぬにとくとも各とく  
一で只奴の山茶ひとのとよづテ妙すに奴の山茶とソサ険  
の別人え深の山茶とくとくしたに似をもからまにガ障■すうき

香齋堂故事ハ京都之産■書者姓松井氏名三三子

二十

近門うあつ、鉄舟の子也。又三川の名もいえりへみ、並木  
杜言作者トナヌ字院賀掾角野作シタリ世人作者トえ祖、  
山度大坂三越竹本旅居、  
山度戯作浦山肥前近江守の位の法小口とねづみの三月  
作者トす享保九年正月廿七日余崇美泰光平易堂集林すと見え阿禪院穆美可

居士ト  
行ス上ニテ

卷之二

肥布院は近江守の小僧へ名と古間と号ひ積字を小ちくと號  
因性命大明丸と申小冊三五松自叙アリ近江戯文ニ序ヲ書コトメツラシテヘヨニ禄ス  
名と申すと申つてゐるも之は徒中もあらずてゆりトハ陀羅尼寺の主と  
申花ノ云々化ソナリ井川道途ニ官船和寄ノ再文多ル所ラバカチ其  
申生■えのれと大塔遂にレ脚ヲ出ぬ  
藝ニシヘ先人エラニセヨニ今比野波ニ何ラカ積シ日ノサ本ガ流管庭アリ和寄  
肉豚の会才國キ一法子とソト博醫院にあり帝室ハトモ  
有詩又アリ農業アリ商賣アリ武士事ノアサシニボノ相ヤハラケン人多サカシラロ  
小寄山口還俗トテ堂宇すか御はト右儀のすし大弓記住  
左仕神ノ稚化並多ノ也音風声水音九ノ天ノ覆ヘル世ノ載タルモリ古ナキ姓  
セヤクハ役人トシテ主君申場所傍せ之居宇は加賀ノ郡上播磨  
節唐船ジアラモトリモトリ拍子ノトリ揖アレノラモ揖ブヨニヤカニラッヒテ津ニ申  
禄岡文弥角を支おの海後廢たどと昌造は  
トシハテコナリ深山ノ奥ノ里ニテイヌラシメントテヅサモ禮ノ禮象形ノ像三  
ナミチヨシ小ちよみと申せ立草もとソト計獻■油ト書ト乞迎候  
仲ノ健ジニカケテアセテヨシノ大吉日ハ元ニ時ヲ得タリノセテヤト明在  
年保元年申ネ春ナカキ日  
近松序之  
まちえいの戲化のトトヤシモトシテ之がナガル化有マトモ  
近松化成の方ほと戯文の本

らうりをとけ置後の日既にその趣をもつてえま  
化者ともすれど也承氏と名ふるはくとぞも  
さるのまことや文中要と株ハルすとテ持すれど役かとも  
れ三井寺守りが迎ねるは成の傍の山から不法があつた  
又二代目美とまゝ、墓八千里守小布判  
文中に元祖義を支へ得もゲー哉ハシナリ未だ出でえ祖義をまゝ墓ハシム人か  
トニ正ニと汚空ハシニ迎ね墓ハシムとあるは松に山モニシテ平  
度渺ちのとお特小戒名あるハシトウと之と申す依て而ニハシ耳底ハシ  
とかひて是と云ひて留ハシハ精清の清持し

阿粹院 穆矣日一異足居士

詩集

吉保九年甲辰七月廿二日 谷名近松門左衛門

中日文  
記入不戯年打序ヲ一覽ニ近ねり事迹モリ  
臺迹二幅ア

「美人画贊」  
二、『美人画贊』  
一、『辞世』前章

甲冑のあら生地で武林と號を三槐九卿不思及

神教信道行可有鐵馬耶  
市塔塔方まで中

おとづれの小一生といひかく今いの際のソラ、まことに一大

少子も勿に後患至るの心あく小心乃社おもて一

多之不盡。我世好學，家無二

近松門左衛門 桂文  
姓信  
名  
行元

卷之三

阿耨院穆矣日一臭足居士

又國人の小争い、或は人の間あつ

惟中堅少人余校至今  
画之土佐画の如くある

樂天の墓中の友人、義の子の元

洋の邊昭和海中の島に捨かつる事

とあると申すにせり化粧云

わづんむれと嘗代ふさんは風月

衣裳表具アリ

よこねづらう

平昌堂迎セ七十歳而隕

近江ノ祖ノ祖ア後近江半二作フノ祖ノ蓋ニ流テ事ヲ取テ近而義登勵懲ノ九字ラレハス  
山中文字ハ肉筆のアヘン内シハ大坂中小之山の二幅  
立羽ノ奇王程ノ序黄人之作アは奇セ事ヲ取テ近而云うトヨハラトヨリ近松小  
説ニヨロラヨセシト足ニテニラルコノハ実ニ本邦ノ季葉翁ナリ

廿一四鶴ノ墓ハ大坂八十日午前五時半西向の右より南向有

三例目  
中かど七百勝ア主鷹岡内ニシ古墓とアラムシジヤウ西鶴ア  
墓小堀ハ余作も古事ニアリテ甚よくも角が花あり  
宇の下か小石者ガモ穴アト圓サホシ縁の墓へリ守より折  
くもと三事と不

掉石三サ少尺余

枝木又墨石三サ

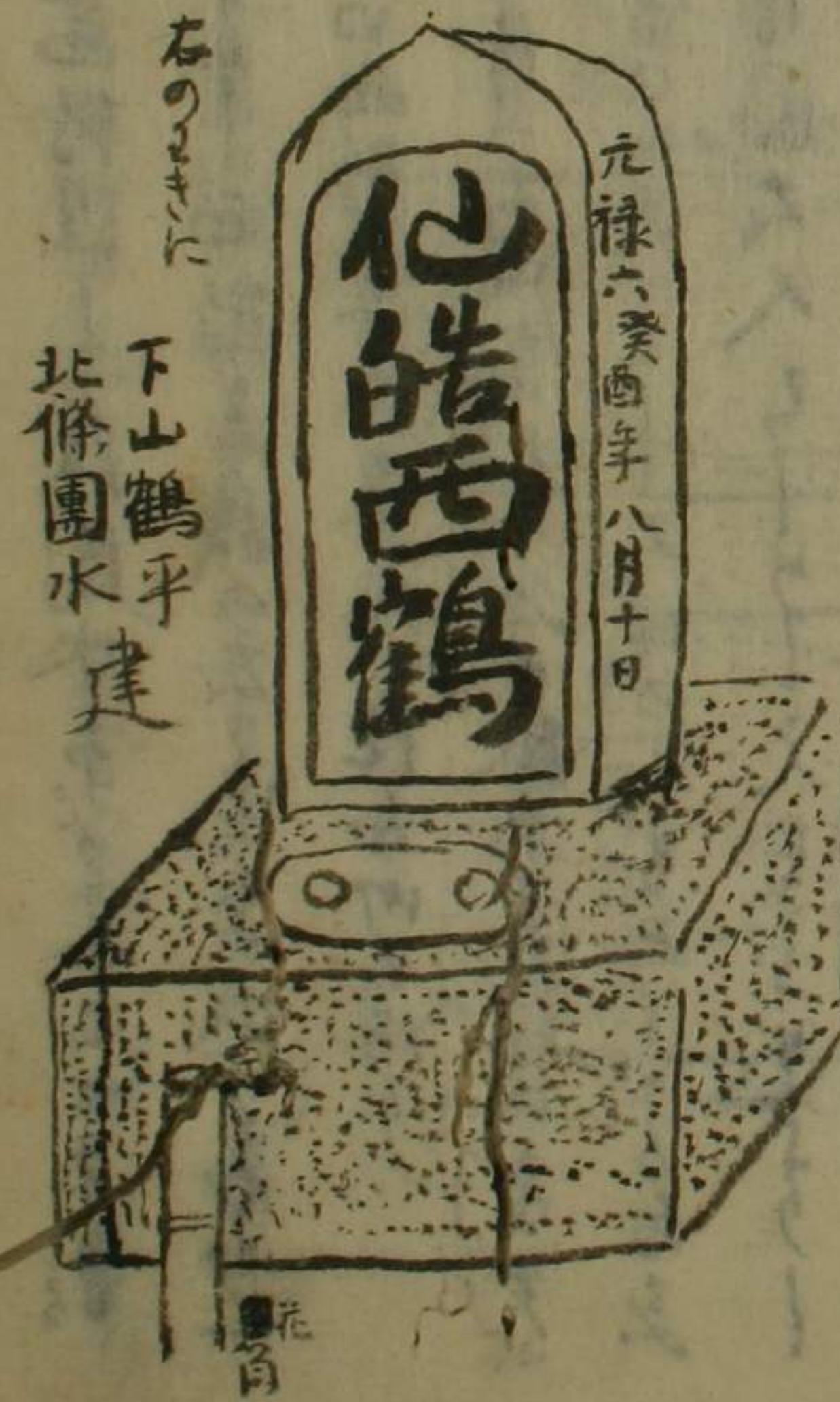
七八寸

地三ツ入八九寸

石面大字ト用

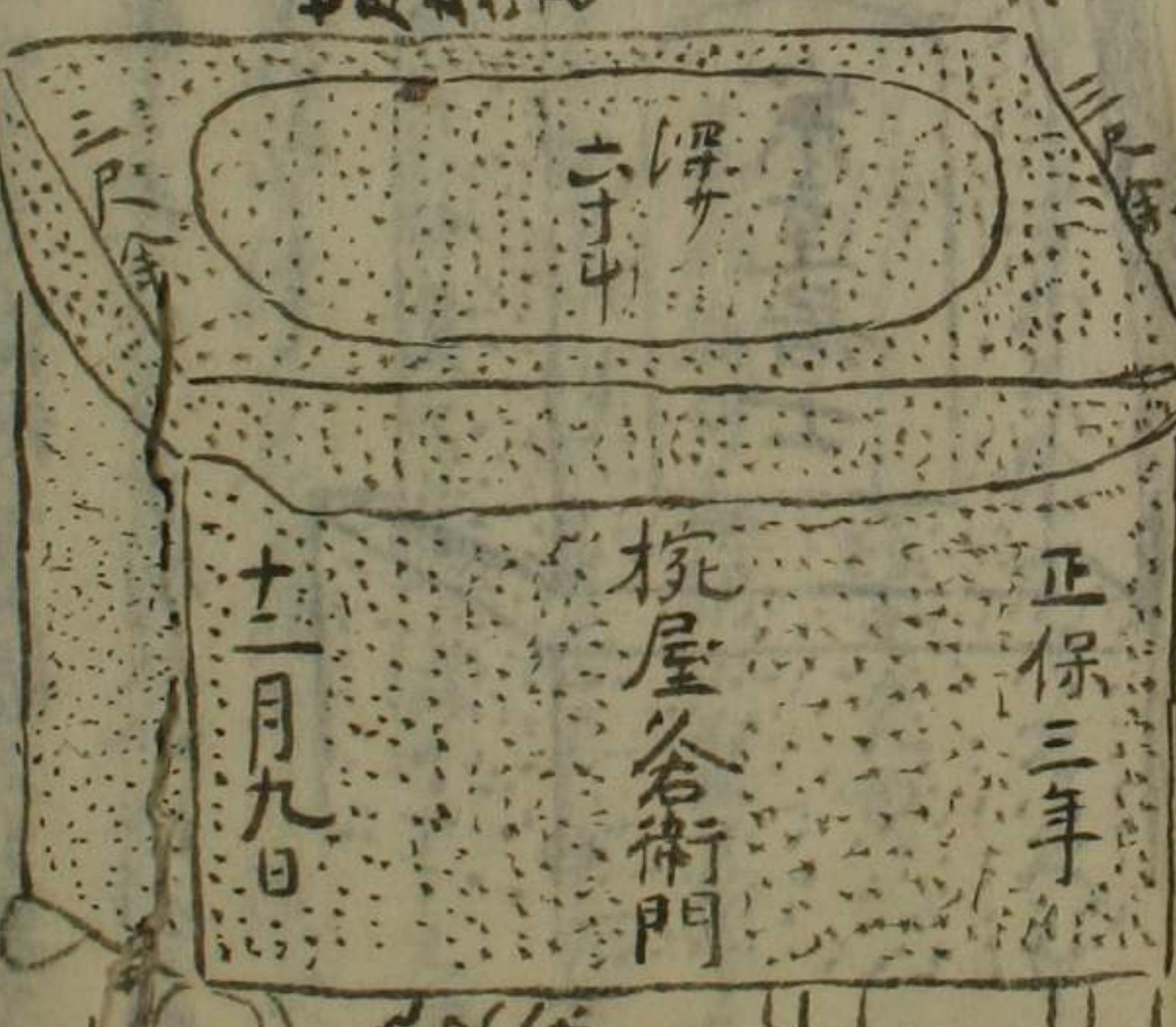
右の事にて

下山鶴平建



廿三

右圓水ハ西鶴が伝き西鶴没して後圓水未だ死セキ  
于舊居とちどりモ半西鶴名残の友と云原氏原小え  
之をう又姓は鶴小曰西鶴、安原氏原ハ桂公町ふり  
族ノ名す内のみ水井ハ大坂東印の跡未見  
ありふ縁ちゝるものハえど一太陽の人もううる者多  
き一未年吉光圓夫人もトテ人出さるをうり  
て人をともうねへまじ向化革の途中をも庭踏あ  
て水井、蓋板中少しあり列毛と捺毛にちく石を立  
すて文字もかうけし恨じべ



実相手平堂の事ある事あらう石名小宗連の墓と斗争してあり延宝年中少後一墓の傍小一本の松あり其の傍より其院入が生れもと仰むる人をうと彼地をもゆえの墓なるは此世のいへば時めまことに豪家とえ奉り別ハ西山御所宇年堂近側がある碑焉と



右墓の傍多に生れ少しきサひ丈余をサモスシテねに  
方やりて松をありに年余とゆうしなさん  
追古曲三原源昌著卷之二正頭職のあ根小翼ありて是を  
多のめくよんこゆきよりもて一列小並居一中少一ノ羽  
せまつても人へ天和年中少後の傍へはり一章一代  
男世とゆえりやくや五家井井口の姓也と云ひし  
のむと人草中者のある傳小ほ根天目小  
口か一のまをりと河之水はと能細流の多  
後りものと高坐の段不今しても豈意ハ

ノを創てゆきト畠リシモほえはすとす  
スルヘシ歳越くふ美ミテ小御役ト字跡  
一くと云ひたゞバと混合レリ也トシテシテ  
之れひがすへんと見らまし

廿三 こひの墓ハ坂井は新地に寺宇全四社のうち

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日寺ト

法名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

寺名

千日

あるものへ寄り前はむづらる者無事か懸と云もの二枚載  
一毛冠ともさむき少子つゝ一毛表天明四年十一月  
毛の毛汗の附馬立身すすへくわやうともすすへ毛冠  
毛冠太の毛汗毛汗すすへくわやうともすすへ毛冠  
もよひふるにそぞも今後もあひて不ふのえ

あるものへ寄り前はむちに者並木五駆と云ものニ付  
一毛冠ともさむけ事アリテ、ま、一毛毛、山岸相長翁也  
與り毛汗の附馬は、もすんふねちともモアリ毛冠  
竹林太郎の生立て大はく、ト、坂井也、もい  
もよみ、ひうるにスモモ今どひ合多ぬあひ、ソトの二  
括、寛文の八既不度安シテ、余小行、既、あ、内毛モセト  
ソヒ、と、か、と、か、と、か、と、か、と、か、と、か、と、か、  
既、カコア町額凡、時、同、セ、三、ナ、イ、ニ、開、セ、ト、  
北、一、名、公、之、原、の、比、ト、大、ト、レ、の、三、名、公、之、原、  
加、六、毛、と、寄、前、は、む、ち、に、者、並、木、五、駆、と、云、の、ニ、付、  
ある、名、と、ア、ル、如、小、ハ、立、毛、と、裏、毛、と、裏、

とある。もともと之を以て、おれの化粧のたぐいへ入らて引  
ひ出さるよ。あらゆる所へ、一派人達が、この室町物語  
を居説に泥テ三好ノ承、ち町、金主ナリ。一十ド、云附合、ノ道ヲ  
中流あり。事もあらゆり。比奇前奴即ち小豆つみて、ち縫方  
もの。こも五度此に経、身にれて、父、子、孫、まとソル。一、義公  
も美もろく、止むを得ず。一、対、小對、了義也と名付  
けられたのと、さう。まあ、一といえど、其役も又、もじらし  
年竟ハ、多き。一、平野、大野、御内侍、御内侍、御内侍、御内侍  
やあとは、實に載り、年少者多く。一、え、年と、御内侍、御内侍  
え、ワカ堂ノ一、麻子。

此の馬は常に家に在りての如きアガハナの

後不見のう實文中の生れをもとて源氏乃

之見しはと改新  
事中、録下へん

生一萬子少てあり一也色、施瓦申、  
在本八

左峯、肯雪力別里

又南古志峯見小三井の戒名と同雪月画とある

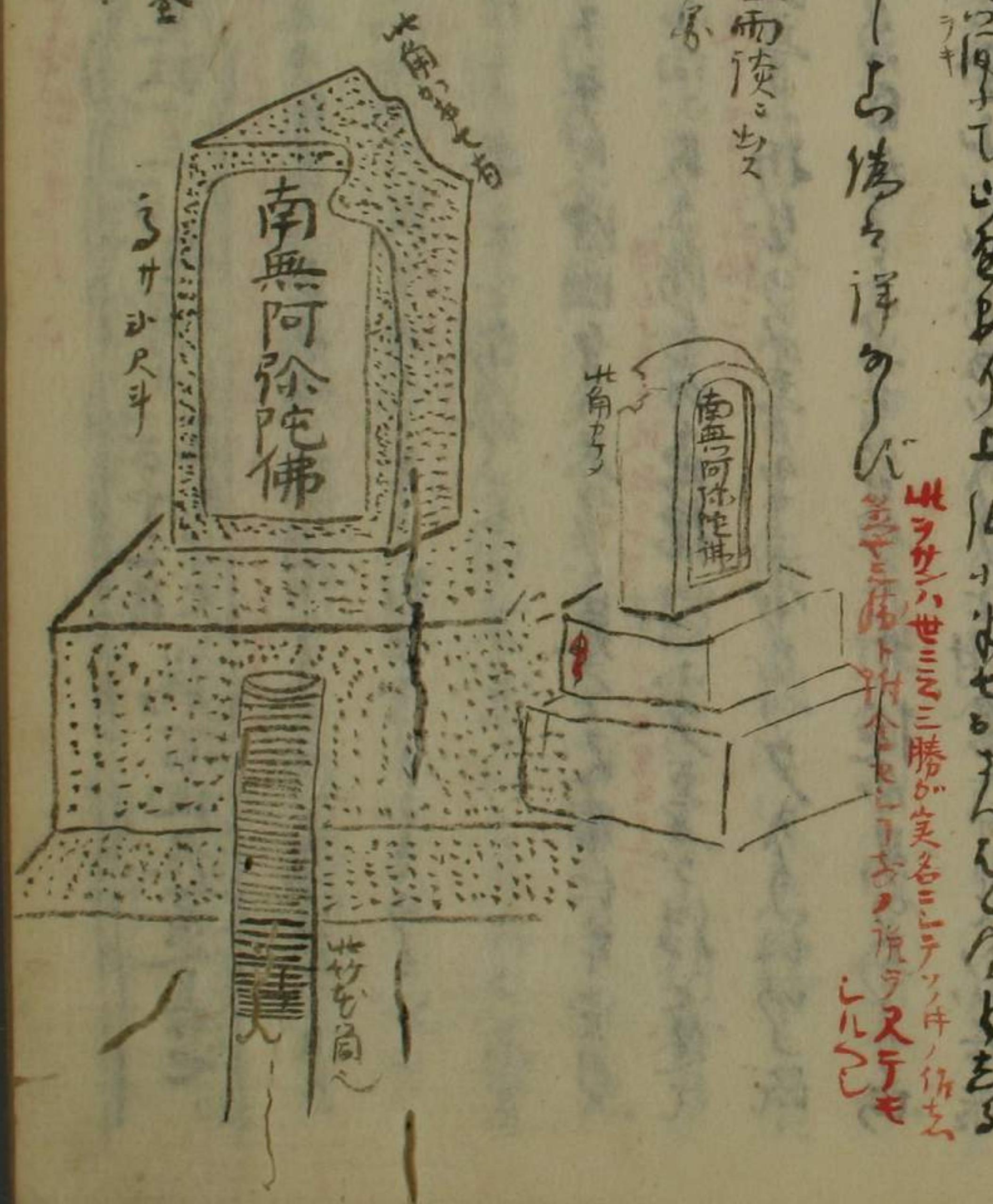
此間言葉集ラレシニテ、後二作「カタルモ既又別」、嵐月日血ト戒名入りタル墨アルク。アマラハ再ヒ尋ヌ。

事多至とひ毛の陰元行八年十一月六日大坂之乃  
上吉之難は持一路

傍ニ自殺ス

此ラサハ世ニ云三勝が実名ニシテソノ件ノ佐藤  
又テモ

擧幕空而後之也



墓 ウニロニリキキタハラシテ建ツルム

寛政十三辛酉二月日 云々西をはせ爲百圓忌追善也

寛政十三年正月廿二日是年五十五年六月  
近頃京上よりモノニタ高ガ文ヲセタリ古傷ニシテ

すてのゆきの徒生居かと席に坐ふりものより  
かはる所より追善とかひゆうつゝと

品

有体なま取下千町淨圓寺の塔宇ノ墓とスレに本堂ノ

棹石十三六枚  
モニササギ。六尺余モアル

曰 捨え耳ノ豆ハ折生の多方面にて扇をのタまりにゆび  
ニ代目の音ハ自又スヒノモのあを吉延金集のありぬ  
乙祖ノ扇をの全山とおののネナリと御倉ナトヒシ居詰

室ニテ文章といふ絵文少もとの御全の全山と名リ  
あらゆる人盡て書り花岳を春ハ波入山成名シヤモ  
之ノヒと書リ予せ後とすてます後は疑ひ切支膳と共に  
伊圓寺に之をタエリ其とえども此芳春ハ折生乃  
タ高にあつてあらよぎやのタ高なるタモ ■らモ一束  
楊雲小波にて駭無ナリ酒井の行者少しかく不穿  
ち波ニタ高カ奥去リテメ前ルアラクヨリ追善イットナコニ  
鑿玉あらよぎハ一束ハうすいも青葉

箕山うた波小タ高ハモ廉客以併少とも絕色アリ  
眼ハ瞎目少てあらきとえどもアリサタ高アリ安死ヒテ  
ヘヨリ一寛政十二年正月廿二日是年五十五年六月

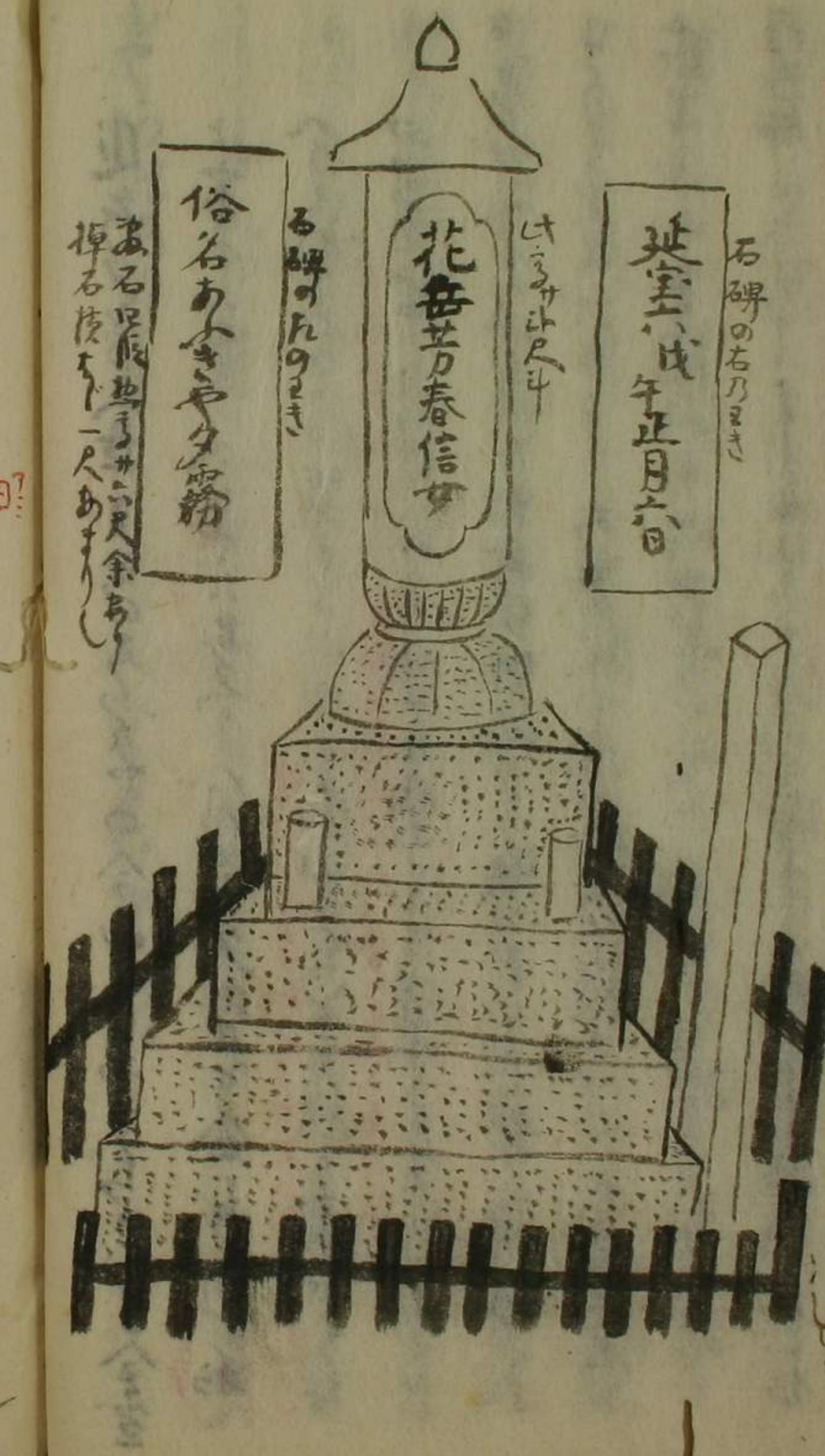
近ちに章十数枚のうち最も人見山と名小字も金量  
と書く。余のへき山あひとひ見山と名多用。而ら  
今ま全くかくも未だるに何と金山と云ふとしけて名すとも  
ゆまと書く。山のひ見山と書く者近づいて之を  
ト  
尿語モテツケテルニテノ文面ト元ヒシ

おとし時 いわゆる辛酉とつとものじとふ

今ラサニシニセ全年天人ナシク一個ノ上慢乳ト化スカレシニ母鬼鬼コキニ階テ、  
ユノ様ハ柳ナクアモアシニトキヨツシモホビ年ノカシ

石碑の右乃ヨミ

延宝戊午正月六日



四五

成化後年墓は大坂西大長守にありその太水が大長守安

只小ちより水の至失ゆく墓が泥乱して或ひ一處一又山明をもす  
原は山が莫テスふせばして止ぬ山海がめぐらすあ伏連陵して大  
城小島り以今後少しおほき泥沼をもて併同山島りて裏あるす

世一小今様の形うかびれぬまこと

大淨曰承ドムアリ故治の居宅小島りば是同■名異人ヲ寛故  
九年十二月二日天國寺のやう二百二十石をもす所を下  
てすりあはれをうその御大城不道ほすよより快晴小島  
少く巡回一あり天王寺付木本は村もきつの五人小島て  
故公は居の迷跡と氣は承トに故治の跡を今少く計地小島  
小島つゝもあり生もの滅し當時ハ暮暮ニ近國へり也一中  
之故治と小春の書残して至多一色あり

2. 由來と云ふ事

今宵ありきゆ  
が一あつり本を  
われほら本  
の果みらいのはも  
わわつまくゆく  
とをあき松山も

らひよしのうへ  
よひくたまのう  
内記上書  
はいじゆ  
十月小月  
法事

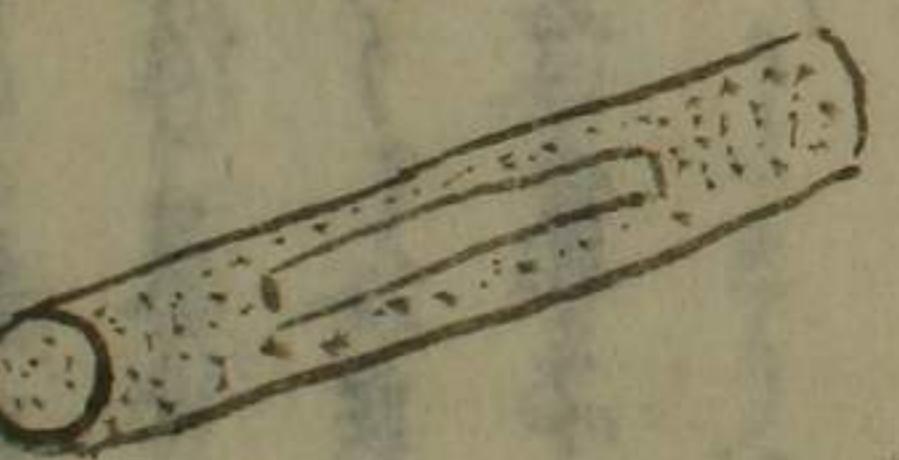
其の後公底ちあがみ奉納の水杯を天皇御の元表の傍（シテ）小  
あらわし白柳の訪（シテ）天皇御の訪（シテ）日ハサアとぞく  
大坂出立の日小笠山に宿す事一月ばかり桜入が墓生と辰五  
即（シテ）御の水井とえどもまづはるに萬葉の送恨（シテ）さき

萬葉詩の多くは古事記的で、物語として穿鑿して  
考究したのであるといえども、天皇の人として神と親しくて文書を  
まわらせるからである。  
アラマヤの萬葉詩の多くは、水井の多くを鉢に蓄め、

大あたけつうよし  
長サニス人守根口の  
波ハナす中波

右の木水河を古のうて送る  
淀より底ややも地なり

朱東壁君之行



史七

千日まつりはまのりに神の墓をあらぬ豚魚と見て  
北の邊の者の墓は墓石があらず飯のひらと彫刻しよふ  
掉ると達てほ人の蔑名をもすとまよへ一時の戯と小似と  
後人口服と食るの事多すと成て或々博徒の墓かど少抑す  
と刻みする上少掉ると達たまう送り墓なりと云黒筋の墓下  
あまゆい戸四戸は小倍とり一件ち坂石が富うるやう  
石塚向里主所あり

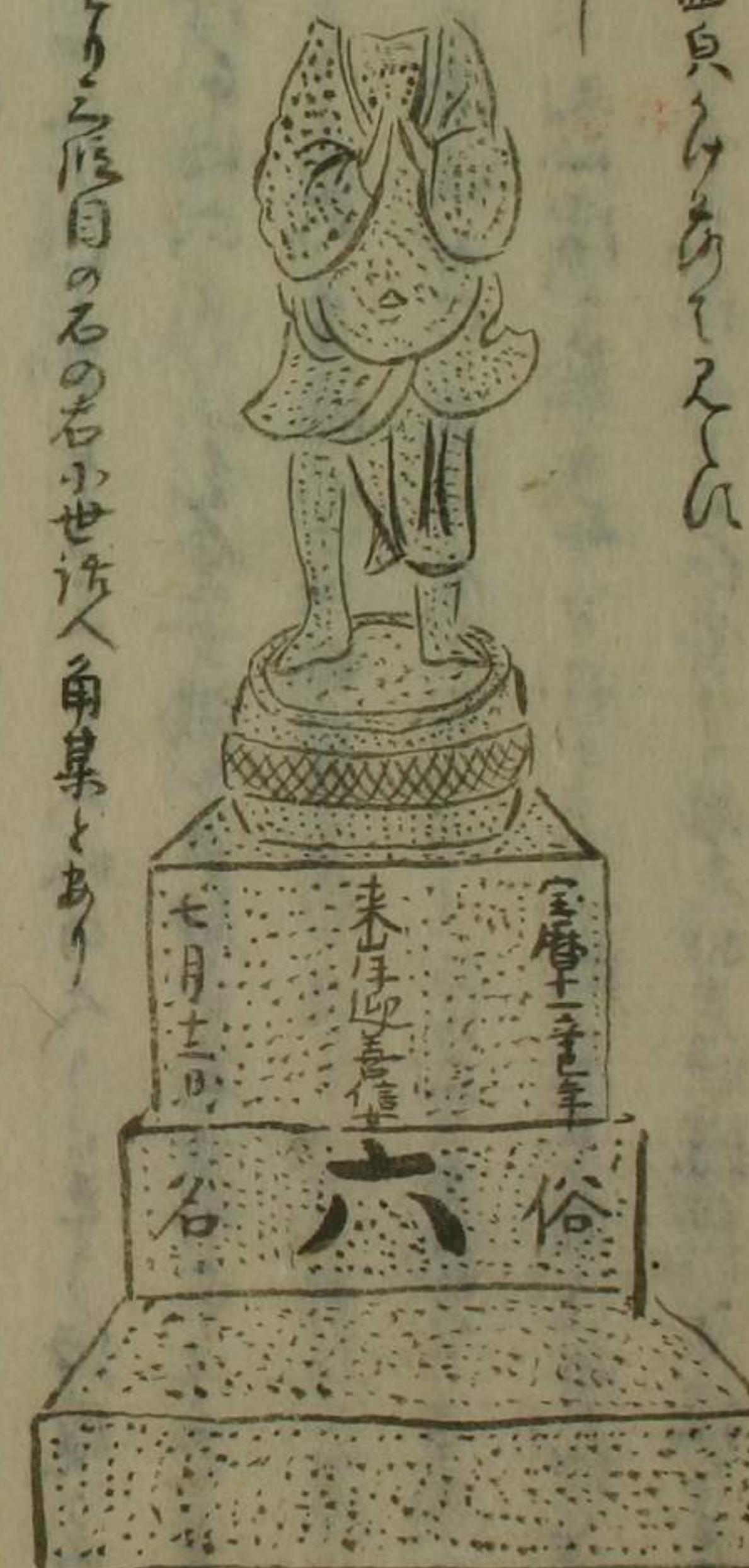
廿八  
曰わよと人良サ六と少もの墓なり宝曆年中の事也廿  
云乞食ハス儀馬のものと寄人アリと云は太陽の使  
者共ちるをみて墓とあるヤリニ之の墓あるニ既レヒ

中陰未成石あり上少ハ石少て少く金形と刻一色んはうと有タ  
酒樽の上少辛夷の上少曾<sup>シテ</sup>上少有て又入<sup>シテ</sup>せら以  
仰小倡とばーなるや一件ハ云ま<sup>シ</sup>れあらて廻と風に  
人と争ふ争へりもあらずちのの人と云うに逢つ原  
の伊豫に上と云ふと今を酒とのりすありせらふと書  
一ものうちふ生歿ゆとゆうと

或人曰酒徒廿六の墓の石と料少てのちも酒市をもじ  
く不又云猪<sup>シカ</sup>が墓の石と料少て服用をもく方性と云  
すと云ふそりへりひ出<sup>シ</sup>んりふほ院と信ド  
う酒市と云庸俗字はすと云<sup>シ</sup>サ碎<sup>シ</sup>きのし者

あはれ、群をかきり又止とよべ

六、石像面貞



The image shows a page from a Japanese manuscript. The central title is written in large, bold black ink. Around the title, there are several smaller inscriptions in red and black ink, some of which are framed. There are also several red square seals of different sizes scattered across the page. The background is a light beige color, and the overall appearance is that of a historical document or a commemorative plaque.

延喜元甲子年七月廿日竹本清之少掾沒セシ中追悼  
登句號州同馬喜教音曲十ラブ人  
えむ竹本義丈ハ天王寺傍村の人。名も竹本也。而も居  
ナシニ熱<sup>ハサヲ</sup>アゲテハリノゼウニ任セテ竹本二代祖<sup>タツミ</sup>  
道<sup>トモ</sup>在<sup>リ</sup>伊豫<sup>イフ</sup>高知<sup>コト</sup>城井上樓<sup>スミヤマニ</sup>磨<sup>モ</sup>と水の<sup>ミ</sup>山<sup>ヒル</sup>  
利<sup>トシ</sup>有<sup>リ</sup>京の<sup>キ</sup>いにか貢<sup>シム</sup>小<sup>シ</sup>うけ玉<sup>タマ</sup>一<sup>ハ</sup>個<sup>カ</sup>の玉<sup>タマ</sup>とひて切<sup>カ</sup>りて  
音<sup>ヨウ</sup>集<sup>シ</sup>書<sup>シ</sup>名<sup>メ</sup>清水<sup>ミズ</sup>ノ陸<sup>シ</sup>や利<sup>トシ</sup>ホノ門<sup>ド</sup>人<sup>ヒト</sup>キリシト云  
哲<sup>セイ</sup>意<sup>イ</sup>良<sup>ラ</sup>書<sup>シ</sup>安<sup>キ</sup>永<sup>エイ</sup>泰<sup>タケ</sup>元<sup>ハ</sup>吉<sup>ヨシ</sup>川<sup>カワ</sup>村<sup>ムラ</sup>清<sup>キ</sup>之<sup>ノ</sup>家<sup>ハ</sup>公<sup>ハ</sup>理<sup>リ</sup>事<sup>ジ</sup>無<sup>シ</sup>形<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>能<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>高<sup>タカ</sup>人<sup>ヒト</sup>

この墓又南の方に亘る二三の墓なり碑面小  
正三之墓

安沖の墓ハ大坂御マサニシ町名碑マチナミヒ碑ヒ小  
名陽左衛マサニシ中阿闍利耶マサニシ之墓マサニシと之を易りて年間里居マサニシ寺  
尔一傍マサニシ碑ヒ有マサニシ之八瀬水戸マサニシの安藤為卓マサニシの建マサニシト也マサニシ

は記念の年山紀文小字をひいて、印に書かれてある。家作の碑は大ぬ村清水のところ田のうち、やまとさかにねらうるまトねらうして幸安井の印門主達もともとれ。三土山ふれ清木の下に御金身御の碑あつたまよ中十五四との内、つるぎ乃東もつしいはくとほ人のれんがくつてて字もゆん

三十三  
三百毎の生玉印神高津の社もつてあり一心守るを  
私事多出雲守忠朝  
やまえ忠政社の墓小湯川墓のところに役者河北の者十  
元のもの墓あり其ハ板を因ひ據小人を入れず其守しえ和  
討死のものるる也有り石室印山の即陳浦一心守る

ノリナリシニ生滅モ

**三古** 泉州博南周寺に名跡の墓あり。論は印度と奈仰不投す。此ハ別墓に陽子いはくセ墓亦ふもしく必ス土中に自然と巨木の声ありと云ふ。是復後山主ハ墓の傍小凹なる所ありて之を自立と曰ひて入をばし。

ササニ利休と云ひテ家代々の墓あり。

**大津** 日佐政利休等の墓の旁ハ箕塚隨多シ。一毛ハ義者也。而代南宗守者主所。利休が信友門人也。信利休と云ひ代く義に碑と造り。號立翁と南方宗碑といえ。利休の墓の下削りて。其二の信友門人利休の墓也。

三箇之といふを生かす。自ら阿とひるき。後世。南流と

稱する所あり。

**三五** 鬼叟<sup>ハ</sup>伊丹の酒買ふて。うちあ富たり。上<sup>ハ</sup>氏あり。後

鬼叟姓ハ上治氏俗称云其子は櫻花羽子也。伊丹伊丹人也。

ハシノ財産ヲ准舟及宗因ニ号す。後ニ一家ヲ失。鬼叟<sup>ハ</sup>詔言日向屋<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>ル。ト<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>和<sup>ハ</sup>郡山の野にかどり。これと<sup>ハ</sup>良花或人<sup>ハ</sup>詔ニ鬼叟<sup>ハ</sup>中<sup>ヨリ</sup>。

やま屋の足はかどはしも。その段大坂不経て。山のなり。て齒小せと。あす血ぐれと。ちゆふ。鬼叟導き。と。山鬼の癡<sup>ハ</sup>小足<sup>ハ</sup>上へも。上を。山鬼のほめ。も。ぞり。國窮ある中。小波<sup>ハ</sup>急<sup>ハ</sup>鬼叟<sup>ハ</sup>鬼叟<sup>ハ</sup>墓と。小ものも。そつべと。山鬼の人<sup>ハ</sup>いし。ハ<sup>ハ</sup>鬼叟<sup>ハ</sup>の墓ハ。伊丹<sup>ハ</sup>あり。先ハ<sup>ハ</sup>山鬼の穿鑿<sup>ハ</sup>と。ざる。

西

其の鬼變郡山と詩ト本坂へのえりけの句ありとづる次へ  
虎巻雲中本體セイシキトハルニシマツリ  
星セイ也ヤトハルニシマツリ且アリ西ニシ伊丹イダ春暮ハナカツ早ハヤ樓タカ二ニは  
ちしめよにチシメヨニ流仙リュウセンかへ宅カヘシタ岱タケシマに曰ヒテ新シンはの湯ヨウ尔エラ因唱インザウトカハガ  
事モノ事モノ是シテ是シテ鬼ケイ多タク力カズ行ハム行ハム也ヤトハルニシマツリよヨキラアリ  
りまちの事モノ事モノ不ハズ及ハズ床シベ小コトコトもモ一ヒの事モノトモモキモキ

いふゆのみふへる思ひの名と  
夕のゆうと  
昔花洛遊吟にて云ふ画聲ノ狂言アシニ  
是人東西ニ視テナラレニヨシアシニ  
カニラニアラニ金中ノ魚ノ氷ラニタノ皆ニ口ナテモウナハ吹火ノカゲニ瓦ニラニタメ  
娘撃て又コトナリヤアリスルトトイフニモモアキヒカニトヤイハニチノフハツアニ車馬ヲツナギケフ  
通サ席ナホアリテ鬼はく北とす  
在ノ室ニアニサレ御ニアヌアキ一粒モナク今白ニセヘリトカラ自殺ニ及ナサナアトヘア  
はかセントコノ一条ラ残シシウモノ姫一人異難ニキツモアラス情ナアルヘスシヒトリテ  
ねかきふあいにまほみのれ  
若菜ニアサフモノ水ヲ涙セ雪ニハ壁ニ  
枯葉シ折セテ水手ニシレツヒ下サセ

五種す

珠に鳥書の山はモ住六

上大坂と行舟ハ僅小ち里と更金とももと足尺のちより質  
ねきあるべし

卓シテのゆくは海シテの鬼叟シテをもとて面白  
三十六 大坂と眉毛の辺キ女も繁ひ多く海内舗シテのあらざる者も  
に船西船うち移山と稀シテはけり聲シテのよしと出たり  
大坂の市中少へ東店を一渴シテまほ人シテ途中湯糸シテあゆえ  
取りてえあすが少もりふへきをあんづられぬか小弟附シテ  
川舟シテねゆるが繁き主客シテ酒肴と闇シテうのぼるの御  
涼シテ水シテ小者シテり移床シテあちシテ歎シテと出シテる土地の風シテ京  
八道シテ也

七日シテおもち移舟シテうたよをと能細シテ一風天井シテ小浴シテども

のあ家に天皇御宿シテ御は様シテは未い因シテ・計度シテのせシテ詰  
せせ地シテも振シテれてもほのえのえめ芝居シテ草庵シテあり

天王寺シテの大門シテと拂りて一室小隔シテのこはきシテ大地シテの七堂御  
藍シテゆくとほほ根シテとほ西門シテのう身シテの額シテのこせひとんシテ  
ベシテ天王寺シテの傍シテ清氷シテうる遙シテ小西馬シテと眺シテすとへたシテ  
ほほに今剛山シテ二丈シテ山樹シテ向シテ小聲シテえは跡シテ一々山シテ小入シテて  
後シテ京シテつす

男シテの聲シテの風シテを胸シテを胸シテ留シテタシテふシテあふ出シテきシテ御藏シテの系シテ  
も緩シテくまさんとこうちうや

竹の陽シテの大シテの戸シテのいすシテ席シテもあらシテせ構シテのふまくシテ

高人にて來、房事のまことせ又の者者水草との類いとをもの  
をりくらむるをせゆ出一傍の上■とあまうにて一つの商人のや  
あら<sup>シテ</sup>ぬきはまよ混雜すもよりにめちとつるものかく  
は湯もかく

大坂の商人常に風便とかまく金と掛車もらひ或を革簾  
簾尾を鉛<sup>スズ</sup>とて毎日しもぢやあゆすとくわせん小  
と通事の布人までも万葉奥底へくる上にえまくす地<sup>カニ</sup>  
の風景

頃某町の江戸をと目をしる船ひを日暮とてにづ時まで、  
十町余西側三町商人の宿て室と小ハ夜出る人ト一室を

お隣の舟宿もと側小役石せ鳥りとくとも中くせ地不取<sup>ク</sup>  
もとをうち坂とも少板り延の上にちきよひうともくらとく  
くらくらむちをとお出でうごらきき行内と役小<sup>ト</sup>る  
あくはしまよととととととととととととととととととと  
とと喧嘩争済もとまくかみをかほすゆるゆふ夜行モリ  
又城の壁にも寄りゆるやととおふせとねして銀ワフモ  
京にて大ね移きおふせ

町の路よ先よてまゐりくねとモーなものんせとあく  
儀所を小ちぬれいども甚様の云せまへきの商人の出立  
を戸人ふづけ——船中堂宇の紺布も又替ひあくて

いふし曰く

大坂を含めのみならずとあるが、かくは高人乞のたゞぞ  
至しほみとりあてまきもとー是をも因ー高いのあざ  
ゆかり

大坂とまものハ皆様々小く精巧く小御店らうま人の  
店舗ハ多様とくにはの内多々女の裏附多腹より酒屋  
と女店をあくからり京もとは因ー大坂を一休らまし極  
智永ノ市中木戸ナニ吉野江にて(文支ナトト戸アリテ  
く後地ヨテスモ多きナフ)ル京の市中木戸多く大坂ハ  
ヒ廻ヨヨリ木戸ナメ印フ通リモアリ

一軒ノ木戸ゆゑて本戸の後院とあはせり  
本院ふそれとけサセ柳のるとあはせり  
御名とま

あはせむ事とむー本戸の町名と書あはせりとほすと  
まふ

三十九 大坂アカハあはせりけ社カミマツ神磨、生王。天は、アマツ津、アツ多  
天王と稱アマタノミコト焉アハシ少卿シヤウキ也アリ又社はのとば多く、  
ほものとよー口アヒトちアヒト天王寺と傳古アマタノミコト懷アハシな地アリ  
れす天王寺アマタノミコト去年アツシの大坂アカハ小坂アシカーて破アラカシりあり鳴  
呼アヒトーし

三七 大坂アカハて能ものこつちアカハ良賈アカハ海魚石アカハれ入アヒトりまわ  
ニアヒトあり、淡水アカハ漫禮料アカハレアカハしれ中アカハのまアカハ小串アカハのこアカハ  
京の若役アカハ、アカハ美アカハに小運不劣アカハ更アカハ大庄アカハと小庄禮料アカハと

今年の春、右て居とは省略す。  
左に、梅宮ニテ宇多上店  
御使よびゆく。も慢遊八魚平、不可  
のうのきやのあね、うつ廻れど、しは万一もも  
事度りてある。主な村は佐々木、土地をも  
行けども、小戸人の名小島、いし川もた橋、今全  
名ウラニモシヒム評判小島也。のうち

今年や（有て店とはあつたす  
西に梅色三文字、金魚上店附字、  
播磨のれんも甚か減  
風味よびゆく。）も禮輕八魚平、不可  
のうのまやのあね、うなぎ、れいわ一も多  
半食ひておこす。森内村は店取引あり、  
許但子（小戸人の口）あへんじし味も極あく今  
名ウムにまづい。久評判ふじひや（のうめ）  
大坂の市中、おとぎ大猫少（てき）、様多ち主をまへ大猫とはまどりて  
はと剥（む）く事多（こと）あるとおもひあはる、一五月立て御多（ごとく）と  
はさりしも大公（だいこう）と御多（ごとく）と常（つね）に大（おほ）き

多くもうて層見はるに少ひ見れ小大の内には  
ちとすむ事と云ふべからむもく猶かあまきどよほ、いよくす  
か一尺わりすくに大塗の跡ひウキシモサ一のひをも  
は大坂の跡五村に戸数多の村のうちハモラ海二三弓宿  
ちきく又あらそ手を立派のと重てもすれぬたる  
の使ともうそくまづりはしき先を一弓タニ尺アハモラ  
一尺十二間マメのアカスリたれ事にハ九社、ありとて三弓辟  
多村の文易乃高取ケリモテ

太極の氣を  
象徴する  
「太極圖」  
は、元の  
「太極

ひまむきとおとせと一軒人すよく一はまも下しこども之地の役  
あわんり 宇治ハ是處の土地すこちあうりとも思せぬれ  
ありともとも人字をかく留傳少して名前はほれ  
文ひ金て人情ならへ目観うけます御衆を衆をうけの  
況や陽氣の人也と

三九

ちゆくへまじい人ぬるゝと薰蒸堂を人のまゝもせ春  
古人とけりの薰蒸堂又遊興とす一名もせせまられ  
恭包名はサムカニシテアリス人主の居所の先をも  
ニサのうて隠と娶の故にて號はすりへうのたまふ  
者也とあらえに夙朝タゞ又圓山、画し書肆

祖仙

れに詠すて歌人のことと識り又様のまよーとは書人  
行者名はるをきたりもあ画工かいとも思ひてもあらず  
四〇 五つ  
とよく、戯れすてあゆくとゆふ  
そも化者とはせずほんとほふ悪様のものとせん  
透氣半大小深切小もてなす戯作のいゆすすあるとまよ  
者度重ね戸ソレくはまよふとほがん坂を書肆の面子地  
あゆみとよせてあらば

大坂の妻と店多一角上りの糸又腰を下の面子  
どく不招牌とせよ—とんせりともも

四十

富士

カトリヒハ宮傳の事數とすて候にわんをまえ町  
は方に時がふるむとく御時まとばらきけりハ村たつる  
ウキハ太き鰐うり戸を原シモシケニラシト村の月  
をまよてへち朝邊を散り後かどりノムニ但一村の九ツ  
せ方のハツカリぬち蝶く廊日記の伊馬院の娘娘ニヤ  
ガ安ミテ廊とあらかを紙とあるシヨリ草人令  
いりてり四

四十一 天王寺の地キシノ令文セテ奉内の陰馬ハ<sup>ハシ</sup>令我<sup>イ</sup>行<sup>ス</sup>  
ナトカ<sup>シ</sup>人小もほとしん去天王寺院失の財物夫<sup>シ</sup>して  
今ハル<sup>シ</sup>トシテ主様の法不<sup>ハ</sup>定ハ文セテ<sup>シ</sup>内<sup>シ</sup>の法<sup>シ</sup>を

名而別<sup>シ</sup>テ餘人、<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>シ<sup>シ</sup>え<sup>シ</sup>

四十二

雉は雀

延宝七年未陽月下旬吉備國水雲子著少本二冊

吉備國

源階師而サの教不

一天國臺盤を町

西山林光前雪宗四

一桂金町

井原西鶴

一山戸坂

下山道長流

一田川越中守故

名代天郎毛利秀

甚<sup>シ</sup>往<sup>シ</sup>て大<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>モ<sup>リ</sup>アモ名<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>諸買物  
三合集後<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>ナキ<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>ナリ<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>孫<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>頃<sup>シ</sup>  
紙<sup>シ</sup>は雀<sup>シ</sup>ハ似<sup>シ</sup>ナリ

四十三 西鶴は後信友園水元師<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>ナリ七年<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>遺<sup>シ</sup><sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>る

是れ西鶴名残の友五郎、西鶴が草稿の所、わねすものと曰  
水う序文小えひ附隨序のはといへりく書くるものと田宮氏  
乃翁かうへと云ふ送下はむえ大坂の友人近多中野井  
きくは送也

長坂洞穴不つはそやひを昂席

る參

四吉  
ハ自らおれちうりあさうどう■三さうやま風いよやはへ活ん  
て書肆大聖本氏すとねと用意してのらきのをめぬり思ひも  
スシミノねふちあは一ヤカタニコウハイ 予と  
ミハアタテガウトマサヌあらがい■ しとひひの升梯より  
駆け出で候るゆきへと落さうをふほ舌の鳴きをよまと

出庫山右小屋く簾へはゆゆもふにすこ一の谷をどもす  
にえの岩の取ねせねをうちりのせとあへ一にれのゆれ  
上へくまくは、うの及梯角粒の石のすき同へて石の年嘉  
誕生石其かねはと巡り、浦次の社参入車通の場へも  
ふと見てもその跡とあはねり田の端をまよひてよどむと  
しきじれ神事も奥の天神事くゆく陰陽酒樓の丹祭  
酒食とぞ

よだれ汗ぬくえん組は深美なきの音ふらふら  
せは不竹矢はまきがいとふあをは丹祭の二祭もあに  
ゆきもれ組はきのほとふおりちう西の弓をくじくに有

而ち

家店の外の木の下を歩き五人からくまさん  
乗りにきて三尺成らぬ土と石とありましてありまつてあらす  
縁と妻糸と吾一し又はの金取とほ小摺てうるし  
うやん室の戸■下の妻糸をくじまきの竹せきぶ  
くやく不そせせせせんと竹馬とは走りすまのそく  
やち博小あ

は木の西の角から町をまよひヨリ草の東をさうせ  
家店が張りて長き柳の下を宿とのどで車と出でて  
小町をまよひすうとすりけのぬ

日暮ヨリ江戸まで天下をひりびせりうとゆく

少て日暮と西あそびてゆふの長の小折<sup>ササギ</sup>をひき  
右の左の左を歩き詰のまよひ立くやくやめに漕をひきも  
ス一往興しちがき歩き少てかやく下のねあい四<sup>ヒニシヨ</sup>青裏浮き  
とくかきよとへねえらぐ上地の人をさんちやとくよく  
たつひねに歩き少て西の半折をとくよといと興  
ありてまよひ

四五 五段とよまに水と飲水とまよひ水と歩き水と水と  
水と水と水と水と水と水と水と水と水と水と水と水  
と水と水と水と水と水と水と水と水と水と水と水

以今通きのるものうちかくはんを批評す。——田の畔小川の  
音にてお尋ねうとみ者のはけとうりまで大坂へすむもあま  
てひし不貞トと高貴等ハ大河川之音とも小柳ハ宿村神社  
で自家一個の物入を仔細とみせ、書一時以てど出一  
玉こゆのむらふくらへくまもてうるわしき風す

たほのゆ櫻は新町と清の町多居すよも清の内  
又せササリ竹の木々又世好あり奉事へ天井もえんせともれ  
席よ位と仰するも代に皆えせ代しよしち代のもの又せ天井もえんせ  
トモ又世の持よる席席少て清の三の弓矢を以て候人を  
まわるいえせとてうむちひまき席圓とあて居ます

又まよひて腰掛けて居脊セタケとまくさんすまうり  
のまものといふもあれ、俗の呼称コトハシマツすら勝傍セイボウの  
とのせてれば、先小左はの又セミヤ了船ヨリボウ附シテ宿スルて客カモの他ともく天アメみの島シマも  
左シタと云スルせと号シテいり

凡のもの萬方に及ぶて奇麗の事大坂小ちうぢに  
あひ多き力無くよびる事心とふて又は江戸にあ  
りてそろはに思ひたりせば二方には之をりて  
キヌ

至天子御其事少神と云ひ奉  
川上一堵之裙と右の弓へまく  
多喜御子孫と傳て又原の御子孫  
多喜御子孫と傳て又原の御子孫

まば寄ふあはぬも心事さきまに、リゆす席の外であるも  
ちうえゆかへ先の十二を家むすりめが席まのゆくともくわま  
とひく沙流あら客を席の西家にまもれりんあ別院  
奴あら無れりきてゐる女を入盃意小ヨリはまとけ姫の入  
きし乃あらすこにまくすす入盃すと人候はくはまとね  
かく若はるとぞれはくねくえまくらむすとぞれの入  
ゆるのめにテし時彼を准さんと奴の名とくくはくは  
附仲居りてひくとくまくに各一酒みどりの時をまづくと立士  
盃意のあに立盃意につきかけの中行と右のあすの筋のト  
ひくとくせりかくたりの筋とわてなりのうモスルシムアム

に海老井は仲居ハラヒ盃意と右のあへつゝ一門を向金の  
准さんとまうにはしとの付をまへあらう小盃とくと客の方  
とまはまくねくまはじくとをの上へ金仲居とまはま  
とこ方にあひを及斗ハト客うるが一やくえまくにけんと  
奴の名とひよはぬの名とえのとく平財をまつとむらてゆ  
ナカヒキのわいいじもとくまくとくせりへまく化粧局  
天神も又のくわ一但一更と天神とハニ紫矢の天神と  
傍で天神と天神と天神と天神と天神と天神と天神と  
ああてまくあらとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
あまくねじあらとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

支天社も其モ少神

夜神

アリ席よ取テ後アリ

祓禰ニツニツアシテ也サモトハナ補天鷦鷯アリノト別アリ天  
神トソクモ戸も原のヤミモ内位のモノシトミテ共中川

階西の祓禰トモモタリ又新也の祓ハモ一物ハアレル日シ  
入て社あ小坐ハ主客アリテ少社モト御入マテテ子安  
附ヒテ御多幸キ或々多栗粉と附モテ御奉と達ヒ  
戸の向ハ各の向ヒキモジサ廊の内ハ客人アリ沙一付モ  
左席上にて就モトスハ半身タリ又閑居方に入リ件の衣被  
トモリス陳はらヒ又ハ階タリキモ附禰ウモトカモの  
衣被小坐テ開ル瓦房中坐モモトヤコメテ臥也モトカモ

四十八  
ち作のミシキ多一ムシハ傍支信モ体モ伯人ヒリモ瓦房中草木一  
枝杖のれモ皆保オカ武テ陽の毛モ瓦宿モリシモ灰シヒと與ミ  
ウモテヌ

四十九  
今ノ伯人ハ主夫往來ハアレル所ヒ皆頗る美席ヒ衣被は極ムシ  
ヒシヤドシ階建ヒシテ摩キシモト一モテアシテ瓦房  
すにヨリヒヒト施バレキハモテ奴モ天鷦鷯アリ大方  
京の御室を示スヒセシの内乃伯人道也御の室シケンヒナモ  
テ各と御跡一室ナハムアリヒモシムのケ興アリテ此室  
シテ御室モアシヒシモ同小瓦房起の事にて御室ヒシヌ  
セシム也モアシヒシモソク松葉瓦小瓦房ヒシヌ

まよりとの道儀が三四十のひとのまわをぬくとえり  
おひそてもひづかうか、とふほの見ゆ

道の間のあらかふもす單らうし大擣<sup>スギワ</sup>一ノ門のまへあひ

小擣<sup>スギ</sup>一ノ門<sup>ニチ</sup>とすばし<sup>ナガ</sup>一ノ門<sup>ニチ</sup>のまとまき  
とあふあふひだ方<sup>カタ</sup>ハヅのうに客のうち昇に下るかや  
四九 大なきは役者<sup>エイジヤ</sup>も薦<sup>スギワ</sup>すいわと抱立<sup>スギワ</sup>こゑと地の多金<sup>カタシキ</sup>の主<sup>シテ</sup>  
きのをとてて<sup>スギワ</sup>おけ<sup>スギワ</sup>する者多く<sup>スギワ</sup>玉を肺あらどくは有<sup>スギワ</sup>る<sup>スギワ</sup>者<sup>スギワ</sup>と  
くふはとて<sup>スギワ</sup>主役所<sup>スギワ</sup>出<sup>スギワ</sup>玉<sup>スギワ</sup>もと<sup>スギワ</sup>者<sup>スギワ</sup>ハ兵太郎<sup>スギワ</sup>抱<sup>スギワ</sup>のあせ<sup>スギワ</sup>と  
えめと名<sup>スギワ</sup>して<sup>スギワ</sup>あふくと<sup>スギワ</sup>玉<sup>スギワ</sup>と<sup>スギワ</sup>は博<sup>スギワ</sup>と打<sup>スギワ</sup>と並<sup>スギワ</sup>て<sup>スギワ</sup>あふかし

五〇 那は村地<sup>スギワ</sup>から六筋の街巷<sup>スギワ</sup>博<sup>スギワ</sup>ね原<sup>スギワ</sup>りもあふ<sup>スギワ</sup>一ノ門  
リ<sup>スギワ</sup>しれと引<sup>スギワ</sup>出<sup>スギワ</sup>一<sup>スギワ</sup>毛根<sup>スギワ</sup>ちあき<sup>スギワ</sup>の二條<sup>スギワ</sup>村地<sup>スギワ</sup>不<sup>スギワ</sup>いそ<sup>スギワ</sup>れ  
もと<sup>スギワ</sup>は草<sup>スギワ</sup>も拂<sup>スギワ</sup>し  
御<sup>スギワ</sup>使<sup>スギワ</sup>ひのは橋<sup>スギワ</sup>を坂町<sup>スギワ</sup>ふりて村地<sup>スギワ</sup>不<sup>スギワ</sup>いそ<sup>スギワ</sup>れ<sup>スギワ</sup>  
一<sup>スギワ</sup>低<sup>スギワ</sup>いざ<sup>スギワ</sup>が<sup>スギワ</sup>も<sup>スギワ</sup>高<sup>スギワ</sup>祇<sup>スギワ</sup>と<sup>スギワ</sup>山<sup>スギワ</sup>と<sup>スギワ</sup>ハ

五十一 坂町<sup>スギワ</sup>

今<sup>スギワ</sup>空<sup>スギワ</sup>  
村造<sup>スギワ</sup>候<sup>スギワ</sup>节<sup>スギワ</sup>

二三

上<sup>スギワ</sup>  
連<sup>スギワ</sup>

一三

長<sup>スギワ</sup>沙<sup>スギワ</sup>ま<sup>スギワ</sup>り  
村造<sup>スギワ</sup>候<sup>スギワ</sup>节<sup>スギワ</sup>

山<sup>スギワ</sup>

三<sup>スギワ</sup>四<sup>スギワ</sup>

五<sup>スギワ</sup>

除<sup>スギワ</sup>き<sup>スギワ</sup>と<sup>スギワ</sup>ト<sup>スギワ</sup>足<sup>スギワ</sup>の<sup>スギワ</sup>年<sup>スギワ</sup>一<sup>スギワ</sup>二<sup>スギワ</sup>三<sup>スギワ</sup>四<sup>スギワ</sup>五<sup>スギワ</sup>六<sup>スギワ</sup>  
七<sup>スギワ</sup>八<sup>スギワ</sup>九<sup>スギワ</sup>十<sup>スギワ</sup>と<sup>スギワ</sup>もの足<sup>スギワ</sup>めちう<sup>スギワ</sup>前<sup>スギワ</sup>セ<sup>スギワ</sup>ま<sup>スギワ</sup>は<sup>スギワ</sup>足<sup>スギワ</sup>めの

小保寺年中は余半に價と申し在りま事は入等  
女一社切客へ出でてあにニ社としてしるのよ引ひみど  
きをえせす下へ女のもと付送とハ年長が少  
ちびもトテモ地へ出ると皆付送とシテ  
サ所ハモ刻り初乞ハ桶内一挺をよ下ミ物ハ二割リ  
太とハヨード

浴の角。モ浴湯。御飯屋。御は付地。ぬ町。やうし。化キ  
モアリ。女のモトも起ても頬さハ大も同ト化  
サ所の内ハ皆<sup>色</sup>實<sup>セイ</sup>し

ナニ

女之を傍ハ余大坂大圓小異。大坂を之傍かし京。モ  
うどりとあむ方。しあと云々とソツウと云。牛と云。経  
往もつり。モ牛と牛といて。モアキセシ。モアトとうつ  
音のあむ時に女モト。モア。モア。モア。モア。モア。モア。モア。  
とハ黒じ入戸少て。或たとちとあねモハモカト。廊の  
幸禪と判左と云。墨して。とぞん。とじ。もえ。圓陽院の幸  
禪と云。サの方を表情とくせて男と。と。い。文。浅と  
云。おき。おん。ハ。沖松と書。沖中のねり帆折る時。ナ。沖松  
と。灰ふ。の。と。不。心。ア。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
ろく。と。云。人のあかと。ゆあ。次。も。うさん。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

**五十三** 京も大坂も女々丸丸多キテ、京を廻かずもして大坂をカーネ  
モモリ前也の免也少モテ、京ヨリ少モテ、大坂に免前也の免也少  
モテ、角とすと少シ仰る者と、ハトアシモテ、矢上

モテ

**五十四** 嘴に元藝子の妹ふきしと不今ハモレヒニはおのケチ  
チ森大と、余のめー組、大坂少モ端金カツカウの二度おもあり、ゆじ  
は藝子子こはおのトニキテ、アモリシハキモト  
モハタク君、名室子の妹は、休にシカヤニ筋のいも、ほ  
ナ坂少モ、笠居と妓樓とが混ド、ナ木を隠すと、娘は、口と  
の付に、内内机掛ひ振フテ

**五十五** 大坂少モ、寺妓ケル、今ま、薄小キヒウラシヒト、不思議モテ是と  
シ、一じ大坂少、又、伏見やう戸の西東小界、もとモテ、大坂少  
モテ、れしもあらび、高曲もやうし

林雨

はゑのとく、もよきて、もよきハ、毎モセテ  
夜のしわきくつねのト衣はま、不麻の二毛  
ぬ渉も、うすのはいふとく、シテモテモテ  
大し、すすりもり、すすり推し折くけり、モナリ、うち寫ア尾  
川ニサヘ、ハモトと大坂唄し移レ、又三十一モドの寺小界と  
は、すて、すて、すて、すて、すて、一篇うつぐものと、唄と、あヌ

別れを惜しむ者有是へ西むにありとどりのゆきす  
似ば

五十六 京も大坂も幫間二席する小堪するものへ幫間の物識と之  
に酒の内に幫間の者ハモリの有是を取る事無か  
く生れるし又舟町小又艸と云幫間あり酒とよろしくて身  
度少して大食大酒うつはとつてありやかうもつて京の幸  
い原の日と云て行さるどんえて客たゞ一人幸ひ出る人せ  
は幸ひもととて祇をへ別て幸ひもぢ小あまそび又思應者  
し小毛れふ――幸ひもととて祇

五十七 大坂の内小舟と不善 ■ 子あり人 津名一と首の舟と

ノセう酒を瓶也池無との者缺くあると以てし入女の不足  
小首がよしとひとよしとせふとぞうとまもりとそり年罕余  
奉し大坂雨柳 宝曆十一巳年からと今享和二壬戌年からと  
アテ、口松三事すかうとよしとせき越前小一と御くひ士六家小秀  
美小人咲とひとよしとせき開きにね粉とやどこくる崩也却て  
一除史あり父も而下馬を主所とひとよし角力そりとて松角力  
まも小をもりあるにせふあ水のじとよし度ふとあて京祇室と  
一夏小豪あるニサ氏と云不掛想――ね万全と費モトハヒ  
りふる為に松万両 畏小れてニサ氏のた威及び云官事大手筋

き忽ち主人とは婆はねの小塾居よりの中の雜費、僅小万余  
と限てふと合カ一ノ威儀卷く義理の此時のふへ承ふとほり  
ヨリ一と自らもと富多付る一とおふー今窮する  
當て駆けさんとまからいとほくに領ふいそり恵命小陰  
はする年十三年のぶりとほくしてあつまつするアリ是に  
改小陰の年辰のホモトナ折<sup>モトリ</sup>、原氏とテアリ又俄國の  
主事ひはく成日をあす高洋<sup>トク</sup>にて密かに小云<sup>トク</sup>と方  
主は貞永十三年の春の卯の卯女<sup>トク</sup>不あ<sup>トク</sup>て生りて  
許の夏には御鳥<sup>トク</sup>人<sup>トク</sup>後<sup>トク</sup>ハ行<sup>トク</sup>威の憤り解<sup>トク</sup>して主人  
再の世と度<sup>トク</sup>くすむあ<sup>トク</sup>にじもと<sup>トク</sup>主人ハ主許のゆゆ

也情不<sup>トク</sup>も<sup>トク</sup>行<sup>トク</sup>其<sup>トク</sup>の日あ<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>、身<sup>トク</sup>故<sup>トク</sup>うや<sup>トク</sup>の所<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>  
ト<sup>トク</sup>候君と<sup>トク</sup>東<sup>トク</sup>室<sup>トク</sup>仰<sup>トク</sup>あ<sup>トク</sup>、自身<sup>トク</sup>うり行<sup>トク</sup>して厚<sup>トク</sup>京<sup>トク</sup>をよと  
シ不<sup>トク</sup>然<sup>トク</sup>候君の為<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>あると<sup>トク</sup>て相<sup>トク</sup>てあ<sup>トク</sup>う<sup>トク</sup>に<sup>トク</sup>遂<sup>トク</sup>不<sup>トク</sup>至<sup>トク</sup>候<sup>トク</sup>人  
事<sup>ト</sup>■<sup>トク</sup>行<sup>トク</sup>不<sup>トク</sup>居<sup>トク</sup>行<sup>トク</sup>威<sup>トク</sup>を察<sup>トク</sup>不<sup>トク</sup>う<sup>トク</sup>ひ<sup>トク</sup>候<sup>トク</sup>の事<sup>トク</sup>候<sup>トク</sup>人  
と<sup>トク</sup>ゆく<sup>トク</sup>行<sup>トク</sup>費<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>用<sup>トク</sup>して<sup>トク</sup>京<sup>トク</sup>序<sup>トク</sup>も<sup>トク</sup>し<sup>トク</sup>ひ<sup>トク</sup>候<sup>トク</sup>事<sup>トク</sup>  
と<sup>トク</sup>ゆく<sup>トク</sup>行<sup>トク</sup>拂<sup>トク</sup>い七十金<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>て<sup>トク</sup>信<sup>トク</sup>昇<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>之<sup>トク</sup>列<sup>トク</sup>に衣<sup>トク</sup>始<sup>トク</sup>レ  
解<sup>トク</sup>て再び<sup>トク</sup>相<sup>トク</sup>を小<sup>トク</sup>て<sup>トク</sup>寺<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>小<sup>トク</sup>金<sup>トク</sup>壹<sup>トク</sup>又<sup>トク</sup>小<sup>トク</sup>壹<sup>トク</sup>レ  
足<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>後<sup>トク</sup>佛<sup>トク</sup>像<sup>トク</sup>山<sup>トク</sup>龜<sup>トク</sup>脚<sup>トク</sup>肿<sup>トク</sup>瘍<sup>トク</sup>少<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>あ<sup>トク</sup>もし<sup>トク</sup>不<sup>トク</sup>參<sup>トク</sup>不<sup>トク</sup>  
ふ<sup>トク</sup>一<sup>トク</sup>て<sup>トク</sup>ほ<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>世<sup>トク</sup>の評<sup>トク</sup>判<sup>トク</sup>只<sup>トク</sup>二<sup>トク</sup>半<sup>トク</sup>小<sup>トク</sup>あり<sup>トク</sup>參<sup>トク</sup>  
角<sup>トク</sup>も<sup>トク</sup>す<sup>トク</sup>か<sup>トク</sup>ま<sup>トク</sup>ゆ<sup>トク</sup>行<sup>トク</sup>商<sup>トク</sup>洋<sup>トク</sup>と<sup>トク</sup>不<sup>トク</sup>揚<sup>トク</sup>が<sup>トク</sup>あ<sup>トク</sup>不<sup>トク</sup>立<sup>トク</sup>

笑へばほのうす師の駒也。あくまきと仰ひ、かき、ハ娘を  
俳優の妻とや。利敵の為にめとほう。うちより若かくのゆく  
うべ。お縛ルをゆかのゆと破る。一とく即ち後山ととやてた。  
送り一せみとせふに詰りて北朝やまと云病しのぶ又せむ  
と駒也が若く駒也。白角力ト俳優とと昇らむ者也。の  
來まつては且ぶ間ドス俳優もむし。、禁裏からまき又公儀  
の上院アシヤウとむちうゆ行と詔する小毛てはえに下す。我も  
又オはうえてものぶと處士と不吉にねくえに争海先  
のぶひまづら。キ元あ丈角力中にあきびらそくはよ。

キ出東四付小父年老モリ。傍若モ。久ふとてあはてある  
へきあと火りも豊ヨダカ小太と半身ひかりにねく。白角力と  
辞してはおも。一あくまきとひ駒也解ケぬと。は駒也。而外  
てのぶ寢アモツかと。あまく病し。又子母と。うのむえりか。一寝て俳優  
中丈七曲ヨコ。小もよき遅にえせ。妻と。ある家。むく。一寝てえ七夜に  
か。而ゆか。小庵と。治療の驗シカシ。一めふ。夫の病。小立れ。一目ミツカ。娘  
と。印慶。跡。立。往。往。の。ふり。ど。も。不。得。も。の。ゆ。小  
文七病ヨコ。と。うじ。ほ。も。ー。た。と。せ。ま。を。め。し。も。今。と。あ。す。  
そ。と。う。り。ほ。う。が。又。再。じ。ゆ。そ。く。ち。な。病。の。角。か。出。て。え。テ。娘。と。う。す。に  
今。に。金。生。し。絆。が。し。り。す。と。う。こ。又。俳。游。の。連。す。と。言。す。

ア 大抵おとびへ日一々通ひゆの竹亭に泊ると金はりふので  
席小之間をすくい、アガ名とひで云はば故舊知己のア一塗の寺  
は幫向が先へゆきうるまゝよ、アともうがる者あらん、けふ  
そ人問はずてしゆくち名とぞまうりあやし、一休が胞内  
船をかへてちゆ小見ばかり、ア時ふに階しに堪シたる席上の  
嫖客多<sup>シ</sup>、小聲句と需も然ふ、舟に辞して後まことうて  
ア さてねとか、啼やまくいり、 けふ  
ア あくまでも一ぬゆふも、又ぬしげのふ又テ少翁西と書す  
よりとゆゆし仰詠又二篇を残す一首とぞうて多くを客が  
く興小入て席中の寺奴幫向等而興のまことに、ア予に

文とほふもの多<sup>シ</sup>に文かへてらぐりて上

シテくわのふくやゆくさゆれ

寺奴

丈には、鶴舟毎ゆ千の秋

日とげ

一時<sup>シ</sup>に虫のまちんとあすみたり

草の音

翁ありき

キハ 五箇村<sup>アマツチ</sup> 飄草町のあかなに折毛はくつ、吾雀と早<sup>シ</sup>て詫問  
ときどりよ詠も又はくべえを聲かのみて、後<sup>シ</sup>小幫向と  
あらかじめとて立き<sup>シ</sup>て、吾<sup>シ</sup>とうり思<sup>シ</sup>て、ねむ小<sup>シ</sup>吾雀奴  
法中<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>が似<sup>シ</sup>る極<sup>シ</sup>也識<sup>シ</sup>も代<sup>シ</sup>テ、ア<sup>シ</sup>ヌ<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>佛<sup>シ</sup>いどみれ

音道と汚小玉人太小口もよじておれのぬきをくらア小手と活戸

なればこりは草市にてぬむかアリ室の川行 馬琴  
又曰ふ又ゆとりふ事ひあうえかほの人にあうサホヤ画とよんに  
吾准よひしりて予に渴きの席画とよんしりゆゆゆ席上に  
まともまくまく之是ゆし予小贊とも吾准も又らと小贊  
サヌ脚を強柔あれ小トヒ幫同のゆくゆく足掛衛えと早  
いゆ一えまひあき人ともえゆゆゆうつゝ升の傍の軒に俠者ヨシダテの手  
をもと書き予に夢と詠を

ちとそこへ移法まで、あてもども此雲の出入れの記

芋の画ハ  
者モりてはまほもや四の芋  
馬琴  
ともにたくらぬもの語もやうれい  
五口雀

底きの画  
化も終るに付て時計

大河の奴は中、せ者あくともの、娘ふ女とちハのミウトモ同様  
アテニテテアシムハカリハ波小風のうめが一物のとくもア

愁嫁、今わざの西の邊へ出るものかねとやどりてひれなが  
しま人の多くゐるゝまゝ限りあき醜峰じもとよも病便  
の首がちぢむとせ、西使の材木の卸ふ出るものがひらとも  
載ひて立あまといあやしむしこうもきみどり不あわの材木の

往々一とある村おりの廻り小屋へおこして宿するはの也或は  
小室を一處に戸の外

六十一

大坂少しおさんざうと仰うてとく。土地の宿、じんちゆくがひまを  
ア毎ねれと、ちても宿さぬかえの掛り居るあそりへ漕あらま  
かやくふくとくぬし川えねいもひきておれのあそびものと  
きれと半分やうとハ闇のゆとをびべーとソの美しきれの時人  
せきとくい入女の番量 容瓶とるは彼さんぢや客の真ら面  
立勝と一衣被の裾と隠さずとくはふれて客小豆をむ  
そちの陰門か瘧毒さまとよひのゑし入を待すのそくらうす  
とえきて各のうらゆと幼うりしよと辰をうながすと

史て暫時喰饭一施倒す

六十二

大坂少しこそ平素よそ人のりれとモーとうちとサト史  
室とちほの人小字称しにモ仰皮トロムドリと清てモ草  
やニ西壁の有り毛バハタのりれとほする者モトロムドリ  
翠のもの体ほし毛毛白とく、さきモウシ

六十三

京も大坂もは僕つねくへら庵めしるえち神但人ヒツモ  
アホ全支能子ノ庵國ヲ志上モ日じ時侯ニヨリ庵國ニラヌミク持チ東ル或ハ後庵國又後ニテ  
松原市内之の庵主をクシモテ是れをハミムキの事をモウレタ  
伊賀ち市邊 伊賀ち市邊 伊賀ち市邊 持束ル  
又引のく 大坂も京に住居の旅客カーハモモモ街頭悉く  
奴樓少て又悉くお召しら候を一件を所歎きよき也少て高  
あの小廻り一も自トのくじれとて高いの利とほす

あらまへ業角ハタケゆりよくよ腰あらとよす  
おはつもく後  
高タカあの延ハタフを後アヒテか不一日の辛ハリ方ハシマツともさんあにぬ傳ハタシ  
きて酒宴スル一ヒナ高タカふのまごハシマツも自ハシマツふ一個の商ハタシい小て  
得ハシマツするふのを拂ハシマツと貴ハシマツ一ヒナ取ハシマツて三人の残ハシマツとすめざんあらそき  
えも後ハシマツて是ハシマツといゆハシマツ一ヒナが今ハシマツは拂ハシマツいはしゆるこゑをひ  
あらむ是ハシマツものと高タカつ有ハシマツ生ハシマツまく女ハシマツしよことキ監ハシマツとア  
せ方ハシマツ又アラ物ハシマツと省ハシマツ員ハシマツいて旅宿ハシマツ事ハシマツ商ハシマツとあれト女子ハシマツハ五ハシマツめと  
カ根ハシマツ小ハシマツよえりハシマツがハシマツてみね抜ハシマツすハシマツくさくちゆもとす  
げて價ハシマツひとゆハシマツかハシマツて二個ハシマツをえぐまハシマツテえくのと  
詰ハシマツてまハシマツと賣ハシマツへ三九ハシマツ切ハシマツて客ハシマツの空ハシマツ不ハシマツ無ハシマツくうものと賣ハシマツく

あり又金所ハシマツとおねハシマツ手ハシマツて私ハシマツかハシマツ男ハシマツを出ハシマツ商ハシマツとすは者  
必ハシマツ私ハシマツ一ヒナ十字街ハシマツ巻ハシマツく城ハシマツ行ハシマツが取ハシマツし多ハシマツとて出ハシマツ商ハシマツ  
とおれもハシマツ巻ハシマツくまハシマツと京ハシマツとちゆの商人ハシマツうち所ハシマツと用ハシマツと是ハシマツ  
小ハシマツ小ハシマツよりハシマツ一ヒナセ方ハシマツ出ハシマツ商ハシマツのえく旅宿ハシマツと喫ハシマツ一ヒナ也ハシマツ  
仕ハシマツをしておと賣ハシマツそと主人ハシマツとまとも所ハシマツうべ呑ハシマツ飲ハシマツ商ハシマツ  
者ハシマツたて架ハシマツ媚ハシマツよき女ハシマツと抱ハシマツて出ハシマツ商ハシマツとまともと高タカい  
多ハシマツにとつてし京ハシマツの風ハシマツとよびとたぬき色ハシマツ小異ハシマツあり京ハシマツ  
坂塚ハシマツ小ハシマツ十キ里ハシマツ陽ハシマツと所ハシマツ利商ハシマツ■  
人の人ハシマツと使ハシマツい方ハシマツに不同ハシマツあ  
多ハシマツと旅宿ハシマツと高タカい多ハシマツとて二トの割ハシマツは減ハシマツとれ事ハシマツあ連ハシマツハ旅客ハシマツ半身ハシマツ  
と半ハシマツはくもとそととくとくとくに

貪者あくわざあり者ありわざより放はなべてへと運うえられべき土地じちもあり  
六三 大坂おほを洪水こうず除よして芝居しばゐいはゞひすいの坂さかの大芝居おほしばゐ  
ある京きやうのけそをとりも度たどー中芝居なかしばゐも大芝居おほしばゐのあきあきものあり  
あやはしあやはし中芝居なかしばゐへ興おきりたりへ日ひ印いん小こいからからて連れ坂さか  
角かどの生なま居ゐ小こ看かんねあがまりあがまりり津尾つお為ため十帝じゅうたい有あ川かわハハああ谷や  
をつ中山なかやま一いつ波なみ左さ吉きちとと日ひ十五じゅうごひひ太おおとと和わ日ひ  
んんといえいえ

道みち坂さかのせせをすてすてい戸戸ををえりえりすすとと林はやものものををはる  
のの下さししススああへへととええききまますすててここ一いつ幕まくええんんすす  
ははととりりてて神かみととりりし

まで上方むかの生なま居ゐ幕まくの右う側わきを破は小こよ瀬せと交かわわりり口くち上あいひひ  
幕まく席せきうう三さん室しつむむ外ほか花はなににちちああてて役え割わりととよよ上あるる妻め  
ははううゆゆかかー望のぞてもても幕まくととくく内うちけけせせるるああ拍ひ  
様ようととよよめめよよ

らぬらぬとと機き器きのの料りょうううああそそり生なま居ゐととハハ場ばと  
ふふるるああたたととばばぬぬ要いのの機き器きアアママののーーととりりと  
却か合あキきととかかくくああるるもも場ばああききとと坂さか役えももあありりてて茶ぢ茶ぢ

うう

大だいのの中なか芝居しばゐのの役え者わざ小こ門もんととほほいいととよよりり

一

六七

主へ小手手ハイくと毎日するものと小生若出ことて必ずし  
なるの知りすがての書物小改不のもととひ半そよハ千代を  
一りして是とあきよ一算山がち屋小ええむり

八月ウセツ附にちかと出立ておひで伏入へやう今う宿を  
の友人あ様圓陽昇等山の高處を窓写人たゆあ争  
送りの五とくべつは宴■あひるへて風々淀てよめ  
ねよものもかきあひの裏の上たたらの縁よりも馬琴  
ふら船中に小舟はんかをぬ今まほく大風々山の洪水小  
さうこたまへ出びてしまふゑりて晴を行はる立く  
ゆるのひかはづれ今。あはきわは水の跡と見て珍

九月廿日の大風タ小 ■伏えまう大波のろ又え出水一  
邊に築立て波とひ一派へ引あきハ六月廿日の水よ  
とも水えきり一倍と不せ大波の少拂ニツじり落す  
依てち、日つる大波へおはまかうとてテクキシ五り  
大波と立まう反波の勢ひかトせらるる荒野原中のろ又く  
大波あくね通てかせりは未ル一宇ハ闇の狹狭りに街に  
とゑくのれのれ津小泊までは、お丹をとえ旅館ハタチが多あり  
本宮の旅人ほ小泊るもの必一も女兵舟船に舟はかにあは  
どもり

△足らず以下伊勢及近畿の所とあら

二十一 伊勢治の所風炉を大も戸加へ取らんや。上ふハ破風形きく

一て風炉の内小も柄の三ドリを柄ねあり。少し有へぬとけ  
よし尾がこめかどの人ハ此と嫌ふ是れ人の入合龍小役する  
とふとてし全く俗忌なり

とて改ち栗毛もむしをそい戸の戸加へはりの吾風呂

三段

幅狭く窄狭く奥にこへぐい

三カ所えまトあり戸棚のあきもの

下ハ石引多々あすあす湯をあさくして

老人ふき

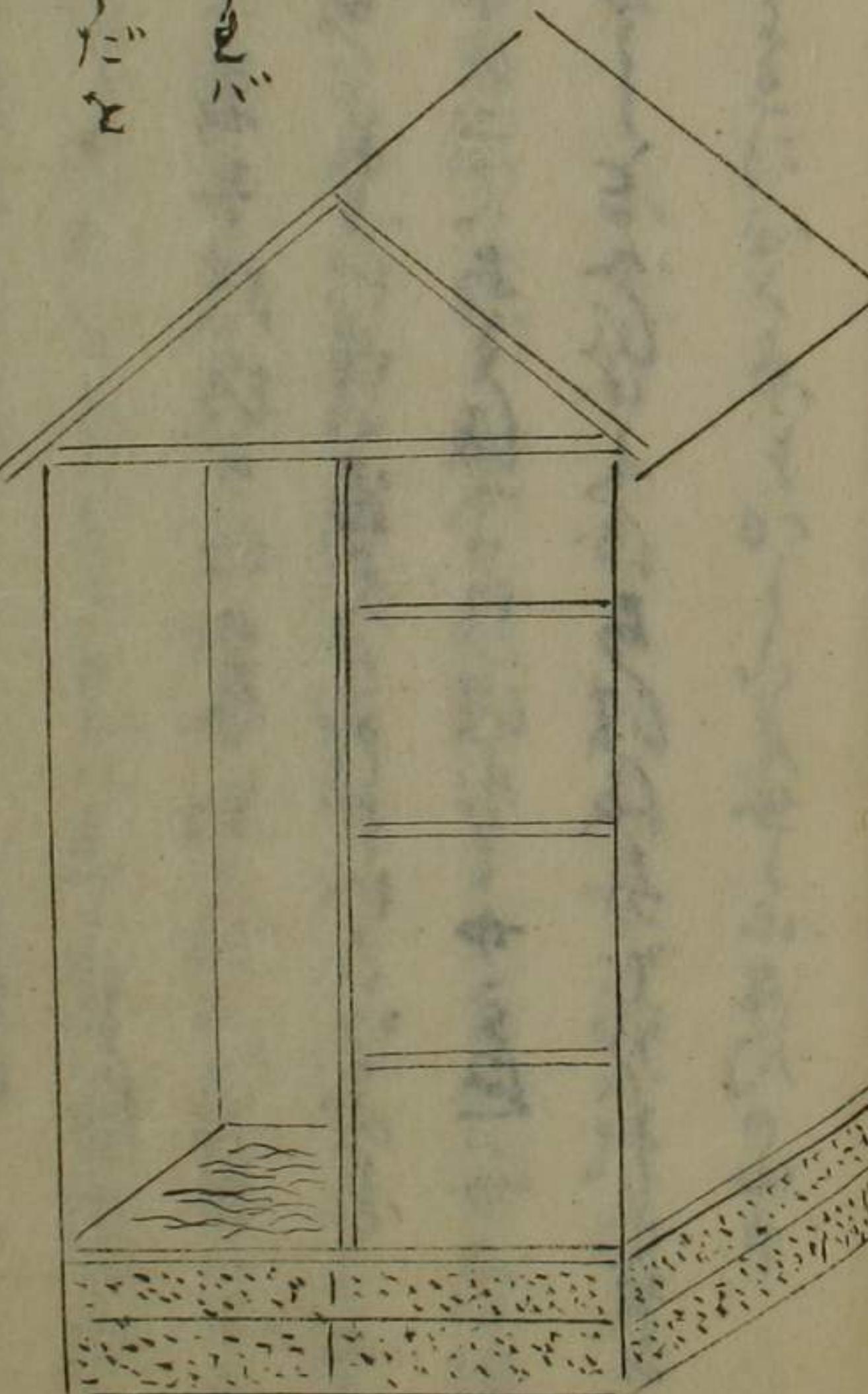
柄下うき柄ね中

ちりしおりてぬと波

育脊中もへり

ももとよとメモとおと

四目 戸戸面とてしにと  
あふ



二十二

十日小山田ぬる町小金屋もとつて旅店小泊のせ地の久人ほ木  
魚林山京せぢりといとゆ切小もてあらるえたと訪に伝り  
此歴の為まであひ月仙和尚を訪べりしが是も伊勢の

りをもとまにえもひて止むと人ふとまづきて画る

たつこはうき

絶田りみてよみ

アーテル絶田の川を一筋かくとせよこの絶田

たるある

シテア入るやあちけむ竹の春

アーテルセなまくある林檎が笛まとゆもくゆの

はめのりでかくすに二えあくねハリヒレトキニ

えらぶのさんの。とえひふくからは反あじりくさむ

るの山ツミ

六七

チ吸の手ぬらあまにいくあもひ一美世シマセ小あひの草  
モロの手乃伝れ小あや一一小びりて本締のア襟襟所あす  
リヤうれ物おとえてがくらうびりに机いもとへん女ニ味娘  
トテテテ清と清とまじとまじこの曲争いとけハレく今  
はのはな古小てもまのめり唱す小ハ似もはじえをはハ小  
のあして多脛とけうよまことえどり是ハ矣ま小をあとす  
アヒホ族入多く工達代賞てこそり又せひ争斗の児女々  
サテ節とすて清と清とめりもぐりの木に舟ボサと舟先とゴチ  
くと船かてまたかづかづかの木とおひ生一首とア腰と  
アウハアくと云てアモアケ風とうひのまくは前ふも

らば隠さにあらざりとおもひを坎しまみのを食ひます  
笠とねは未の旅へつまむ所と見て日一の活計とあれ  
もの多一

行<sup>ハシマリ</sup>山<sup>アシカニ</sup>のと食兒本帰<sup>ハシマリ</sup>のゆれー初識<sup>ハシマリ</sup>と老<sup>ハシマリ</sup>筋<sup>ハシマリ</sup>とすりてもれ  
ちよかに般中<sup>ハシマリ</sup>とやし<sup>ハシマリ</sup>臂<sup>ハシマリ</sup>とく<sup>ハシマリ</sup>身<sup>ハシマリ</sup>とそ<sup>ハシマリ</sup>と身<sup>ハシマリ</sup>  
敵中<sup>ハシマリ</sup>の袖<sup>ハシマリ</sup>一筋<sup>ハシマリ</sup>のゆきをもろ<sup>ハシマリ</sup>と<sup>ハシマリ</sup>或<sup>ハシマリ</sup>人<sup>ハシマリ</sup>ア  
サ<sup>ハシマリ</sup>と<sup>ハシマリ</sup>まで<sup>ハシマリ</sup>街<sup>ハシマリ</sup>道<sup>ハシマリ</sup>筋<sup>ハシマリ</sup>とちど<sup>ハシマリ</sup>の八十<sup>ハシマリ</sup>歩<sup>ハシマリ</sup>とのひあらう  
除<sup>ハシマリ</sup>と<sup>ハシマリ</sup>小<sup>ハシマリ</sup>物<sup>ハシマリ</sup>と<sup>ハシマリ</sup>い<sup>ハシマリ</sup>と<sup>ハシマリ</sup>衣<sup>ハシマリ</sup>と<sup>ハシマリ</sup>半<sup>ハシマリ</sup>年<sup>ハシマリ</sup>が<sup>ハシマリ</sup>ト  
さく<sup>ハシマリ</sup>ハ<sup>ハシマリ</sup>室<sup>ハシマリ</sup>と<sup>ハシマリ</sup>宣<sup>ハシマリ</sup>う<sup>ハシマリ</sup>ん<sup>ハシマリ</sup>一<sup>ハシマリ</sup>京<sup>ハシマリ</sup>の人<sup>ハシマリ</sup>すに<sup>ハシマリ</sup>陪<sup>ハシマリ</sup>て<sup>ハシマリ</sup>と昇<sup>ハシマリ</sup>残<sup>ハシマリ</sup>の  
風<sup>ハシマリ</sup>お<sup>ハシマリ</sup>し

六八

右市<sup>スイ</sup>の妓樓<sup>ギロウ</sup>ハ<sup>スイ</sup>樓居<sup>スイ</sup>行<sup>スイ</sup>度<sup>スイ</sup>一<sup>スイ</sup>えせ<sup>スイ</sup>も暖<sup>スイ</sup>簾<sup>スイ</sup>ニ<sup>スイ</sup>キ<sup>スイ</sup>小<sup>スイ</sup>な  
て<sup>スイ</sup>あ<sup>スイ</sup>引<sup>スイ</sup>ひ<sup>スイ</sup>き<sup>スイ</sup>幸<sup>スイ</sup>暖<sup>スイ</sup>簾<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>く<sup>スイ</sup>あ<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>う<sup>スイ</sup>け<sup>スイ</sup>て<sup>スイ</sup>身<sup>スイ</sup>一<sup>スイ</sup>る<sup>スイ</sup>れ  
土<sup>スイ</sup>る<sup>スイ</sup>あ<sup>スイ</sup>て<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>り<sup>スイ</sup>り<sup>スイ</sup>に<sup>スイ</sup>小<sup>スイ</sup>暖<sup>スイ</sup>簾<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>う<sup>スイ</sup>え<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>陽<sup>スイ</sup>、ち<sup>スイ</sup>  
さ<sup>スイ</sup>き<sup>スイ</sup>曲<sup>スイ</sup>突<sup>スイ</sup>小<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>衣<sup>スイ</sup>乗<sup>スイ</sup>全<sup>スイ</sup>一<sup>スイ</sup>臥<sup>スイ</sup>て<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>ハ<sup>スイ</sup>事<sup>スイ</sup>所<sup>スイ</sup>  
の名<sup>スイ</sup>自<sup>スイ</sup>か<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>し

左布<sup>スイ</sup>少<sup>スイ</sup>て客<sup>スイ</sup>ある<sup>スイ</sup>は<sup>スイ</sup>あ<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>や<sup>スイ</sup>飯<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>じ<sup>スイ</sup>か<sup>スイ</sup>て<sup>スイ</sup>次<sup>スイ</sup>少<sup>スイ</sup>く  
ゆ<sup>スイ</sup>ゆ<sup>スイ</sup>大<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>十五<sup>スイ</sup>六<sup>スイ</sup>人<sup>スイ</sup>少<sup>スイ</sup>於<sup>スイ</sup>も<sup>スイ</sup>し<sup>スイ</sup>ゆ<sup>スイ</sup>益<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>出<sup>スイ</sup>て<sup>スイ</sup>酒<sup>スイ</sup>生<sup>スイ</sup>も<sup>スイ</sup>  
ま<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>三<sup>スイ</sup>五<sup>スイ</sup>般<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>は<sup>スイ</sup>ゆ<sup>スイ</sup>少<sup>スイ</sup>か<sup>スイ</sup>り<sup>スイ</sup>一<sup>スイ</sup>人<sup>スイ</sup>每<sup>スイ</sup>小<sup>スイ</sup>客<sup>スイ</sup>へ<sup>スイ</sup>益<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>も<sup>スイ</sup>  
内<sup>スイ</sup>少<sup>スイ</sup>人<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>無<sup>スイ</sup>益<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>一<sup>スイ</sup>處<sup>スイ</sup>皆<sup>スイ</sup>同<sup>スイ</sup>小<sup>スイ</sup>喫<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>妓<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>中<sup>スイ</sup>  
少<sup>スイ</sup>て<sup>スイ</sup>あ<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>目<sup>スイ</sup>み<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>あ<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>せ<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>相<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>足<sup>スイ</sup>し<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>足<sup>スイ</sup>し<sup>スイ</sup>と<sup>スイ</sup>の<sup>スイ</sup>足<sup>スイ</sup>し<sup>スイ</sup>

奴ハソトたちちあひの傍にそよぐゆうべ奴ハ移席小馬にて  
ニほどひきうそりて身と添ふモ申ハ遙くああども  
奴ハ五世人よきてま客とまとうひし閨房に入ふの内  
小ううて此處へ退散すと毛虫ハ庭殿悪く席上小馬にて  
が一ううに會す人言ひてちうぶやこ是ち市の風と云へ  
板右席もへふは脇を拂ひ小裏て大坂寺或ち江戸のうう  
也れ又ハ潮未ぬいへか似て非あるものと聞す佳木てふ男  
あまくふんじどうとしゆゑあり奴ハ却てあまに及ば  
奴キリまくまくのトドケとくとくと聞へど夕人ど小ううび  
音じのえどもくせ地少あまくまくと天余のまくとよく

シテ御とせ、モソクシ

六十九

奴ハ京ち處をり其鄙に繕ち賀賓も芭モ三ぢかく四方を一  
畠ハ前か皆田の畠のうろと芭と引けしむ繁ハ京風小切  
出でむる衣服を絞り陽面のあわや或ひ陰面のゆゑ芭と  
芭拂は前拂ふるこゆく京祇室と大坂寺の内あまたの名前  
出く隠れ坂町の奴小井へあれを清々と清小似て伊豆  
御リシやあまくまくとアモチ小えどといえー事とぞ  
たゞんと下さりていわと京へねてまでふんとおもて  
ふん杯とふんせとふなまとせのまへ手の内小合て不  
久くまんとよがや一あくねはお早すよくとすもとみだ

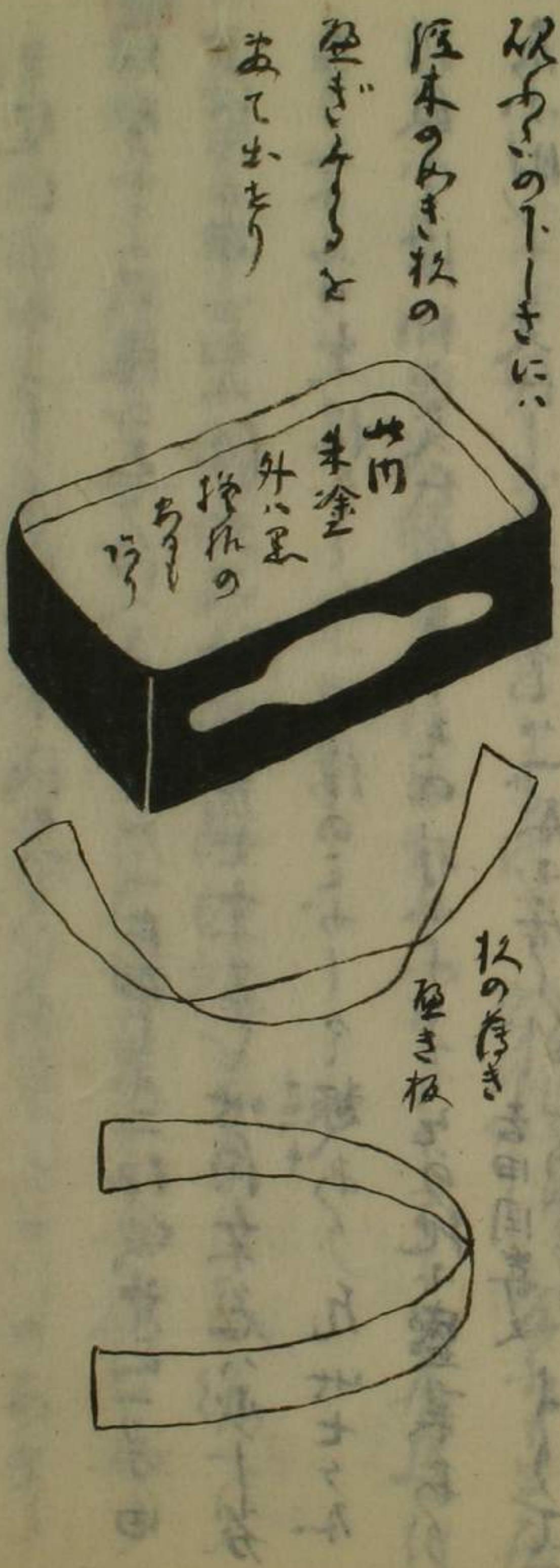
旅人モ宿  
御小金三  
御合算三  
起步坐

事とひまな酒肴飯食ふと不等チキ  
旅人モ宿  
御小金三  
御合算三  
起步坐右布少て地並チタミとよそ一夕方金一顆に旅人旅人モ宿  
御小金三  
御合算三  
起步坐あらかじめ又ほり少しがきと云す所ちうけ泊れへ奉乃

札半ばねと以て小判を兩小換不あふら替はぬ少て食を兩心  
名古屋公と不れと不飲食ハ床少入て後おまほ出で  
草木ハ村附小出でし地並を席上に化して獨處を今一  
分の令地主す万葉一男もり

右布被板に右布末若近の妙膳のひがいと不もの

役汗毛と細ちく一あらわしもつや



七十

や今之の客とりども後髪小へア鬟からげ前陰の文和と日本  
ア客へ是れみと林入山小屋などせ控へ一と堅參しや大

まよ小妓ハシのみを皆早めに底あよに仕事ハシりお風  
情ハシて豈ハシかとぞとハシる客旅宿へ追ハシえとハシア裏ハシ  
はせといをて必ハシ一も奴樓ハシへひきうハシりとハシ奴ハシい  
し定ハシい小來ハシすとハシ役ハシいとはハシヤハシ

七十一 住ちかて奴樓ハシのあづまのハシカ一左布ハシキニハ奴ハシカニ一オ田  
中ハシに呉市ハシカ立津ハシカヘ神戸ハシカセ来名ハシサ内ハシ来名ハシハ少ハシ一  
モリ来名ハシのそはをくとハシ奴樓ハシのこハシカ一と題ハシあり凡ハシセセキ  
行ハシくは朴ハシ交代ハシ年中ハシその日ハシ少ハシうてこの地ハシ盛裏ハシあり  
處ハシ少ハシ時ハシ文ハシべハシてスハシトミハハシトハシ古田ハシ国ハシ寄ハシ又ハシナハシうて  
セセク本ハシの奴ハシとのねきこれ候ハシわぬハシナハシ ナ古田ハシ國ハシ寄ハシ又ハシ

七十二 古市ハシ小芝居ハシありて春ハシと秋ハシと年ハシを春ハシと秋ハシ  
すこソ一木田ハシも極ハシむきうるせもハシ山田ハシ山田ハシも之ハシ在  
あり八月ハシ初ハシ大坂ハシ丘ハシ丘ハシにりつハシトアモ芝居ハシり  
らうハシりうハシ

七十三 右布ハシのみ山田ハシ小妓ハシありて秋ハシ掛ハシり地ハシともハシ玉緋ハシア  
山田ハシてハ模ハシ町ハシとせハシとツハシへハシも人ハシ世古ハシのとハシ不ハシ自ハシり  
ほりうハシ山田ハシも九里ハシのタ金地ハシ巻く角ハシ葉ハシし富ハシ川ハシのあゆハシ  
徒ハシせるのは坂ハシ三ハシちうとハシ酒店ハシの料ハシ、ケハシくよハシんハシ小店  
上客ハシゆゆハシるトハシトハシ又ハシ坂ハシ雲生ハシ吹ハシ天ハシりハシうハシあ  
庄ハシア一万里ハシの心ハシを夏ハシ月ハシ湯製ハシの物ハシかハシせ心ハシを湯製ハシ

とくにあらわ

七吉

八月十日は坂の大平を訪ト通称千居  
ニイハラツ此大平をえ豆原をゆき

西國はまだ未だよせや居前の才子もあつてその志より一  
々宣長若すとぞそり宣長の跡をうつせ大平のことを

小年に十日よりかえりも極へよき人し

七十五

さやけたれ小千代のはの日一ねふか夜のれやまもと  
女房もこなせ所がよきとて必ずほんのれとかひそん  
せきとまとひくはのすぢよりくすめ

江戸の長井え申と齋めかて書とすくい名ハ指掌ササシハ申之一申  
とぞれとぞく申ゆきくし艾アなどの縛ありてたくら書画と

やくわが小坂和田在ハ大庄屋一枚書一これものなり

お歳相続付字家お夢  
そぞく家玉月の月色  
めぞく又馬経塙筆付

隸字

黙二翁

月浦

印コイ大サ

トス同上

里

よみが大師のくろ黙二翁と號す表記

又同人の下等  
吉角が自画墳あり唐低の後もけし事



晋子  
薯子 双書

かくのうへ卷の画中へきて書けり其角の画名薯子といひへ小やちまに薯へいし其角画を下すと

七十七  
芋と卑下ちりあよへ今も下よとば芋とも芋助アシキりゆうりえ根は赤の画角をすや

江坂の殿村こむらかハ蕉門の松風が後胤と不羨むむ哉の事跡タ一せり中に

道のべ乃檜木のふきれりそくせん

件の掛物あり諸集小道端もありなりべつ失事なく

後小たばこ■五十九・七〇

又日人所作のひけもつ小許六ヶ拂説三哲の画小もセ城の墳  
あり三哲とハ宗祇  
宗監守出し布書長文少てあり豈長井元中予序傳と  
之へんたびてせき

七六

松川近の内日影村小光清水邑ふとふくちりと筆小謝肇制  
序所を取小書一三行もあるよ一す一あはははははははははは  
坊ふにあまつて出合と遂に毛ふも頗る好事あこと  
金

市に伊達原ニ席ふ人あり毛極のみ事ふしとの会ある  
る曹も許作拂拂かと喰りハはうあふと坊ハト小  
る曹ハ南春役一伊達をあまつてあらば

津小もほと町ハ情毛と人ああ、あり一、はははは  
とすゆに坊ひ反む歴のオのひととく、逃とめてあと残  
がめくそ一毛と費一し冷あき半ぞ多ひ

金  
三ゆ吉田の濱名公助セラはばり扇亭と号ひわがの扇

画板千牛あうあまと一役すと一日ふとてねまびとらえ  
けお少しこの人物ハ本居宣長、韓天壽、田外巒、月仙、又たのミ  
ヒサウタモとの名りと、號をい宣長ハははははははははは  
實にああ(宣長南春)、志士も皆古人と謂ふ也、今あるもの  
目仙とえたのこ

去ぬる八日とは石橋をまねーて失走小毛毛毛もかく  
河底に階を告て湖水の絶景とまもむによ一形一

九月終冷鹿山をとて坂の下へる山中小移せむ法眼がま冷山と  
そらりいの方に合と開て山をもじる山ふて少ね生(テ)  
まう時ふ山の形放まげとふ(サホのまほがす)精の飯詫と  
名ねとす毛(テ)風は(テ)

七九

金へて御武め全以ハ被せの事餘にトナリ又に内モ  
田石のねあらそひ法家曰ト名と称すふ書乃卷干ジアリ  
ノリトモ画あもいと拂トシヤ写一えどまくつ山小モ  
あハカ一後人山水に名とまふける

呈多印シ相手ノアミテ

またらきて山少モアハセニ

三冬

十八月十三日はとあらて未明五更起ヘ

三冬

秋の雲厚モトモれをもみりけ

三冬

今ア京石小泊リ四時はまだけ丹羽谷長城本多佐助久少人久  
ゆゆふもてあま因くたすをぬりてねをうりと見と巡めぐ  
れ歴中ちよ書と探さがす。伊庵いの山の山形をとふ書肆しよ元福いんは  
不書と不取ふしよおな

布の莫底もだいれすもアタマアタマにあらう一處水の邊のべと岩被紫いは  
五二日も這はるをハ本書かわもいへきと僅すこ一日小こ一立たてトナマ  
キキくくこうこう小こなるが及及び送お長ながクくかへけかへ鑿さく所所とねほ津つ  
山田主お小拾年主おの主化しゆかとと但ただし川付つけの田地たぢハハククトトめ  
摸もああととしをハ僅すこ八月はちよりの風氣ふうきが早稻はやと倒たお一一也よも  
然ぜん不魚ふぎにあらびとと只ただ神戸かみと領りよう東名とうめい町まち田川たがわ大水田だい地じ卷まき  
變かわ一一てら原はらととモリ

半一  
京石をみて太坂のめりてんと唱うたふもと風調ふうかか異い  
又さくととおし不ふゆらゆらととハ章あ沖おき陽ひ度どサさくヒの小  
島しま風ふう田た一一をを章あすすア

八十三

東名アシカニにて喪あるあそを引ふもーうとけるし戸かて簾とみ  
るが一太后タヒを延シ杖ハシハ一ねじ列暖簾スカイとみスカイくい  
土人の日サヌ天武天皇の行幸の時の送風スラウスリスリ。

一日延ハシ神

小相殿コザイハ一日連ヒツト不休ハシアリハシ宮殿ムカヒ不扇ハシ翠簾スカイのミ  
休ハシアリ一ナリと幣マツコのミアリとソラサ休ハシ奇障キヤウトミハー折  
く折り一休ハシアリとて里人スルヒンアリタ度タマ度タマを神言クモと  
祭マツコ天アメニはヒ召マツコ命ミコトし一日連天ヒツ一固ヒツ命ミコトス天麻アメノマ比ヒ土都

新命天アメニはヒ召マツコ命ミコトし

八十四

十カ月も又ナテ官クニへ私アシカニヒシキタケシ不掉ハシりセテ防マツコ

八十五

朝アシカニやとおひえてちはあアシカニの宿

は育アシカニヨリ今後アシカニアリ

五十

服アシカニのとこアシカニけ

季アシカニと候アシカニとよはのぬ

六十

ねやとおひえアシカニと竹アシカニの春

五十一

高アシカニの階アシカニハギアシカニて更アシカニ風アシカニと稱アシカニアリモアホアシカニ  
此個アシカニもアリアシカニ田舎アシカニの階アシカニと頑アシカニて佛者アシカニの他アシカニと稱アシカニアリアシカニ  
ウサ祭アシカニ停アシカニトソ人アシカニおアシカニて佐アシカニヘ送アシカニリアシカニ中アシカニ今

まもはしきアシカニ小廣アシカニの月

五十二

やして小こちるふよの年うか

三冬

佐多を陣あとの短冊

宮がまきものもやして柄の者いさやへまどひらす、かまもす

八十五日を多ぬりぬ士が名を乞ひ候少て

名月や蛇も一ヶ月くままくら

三冬

八十六日も多々川を走坂へまるふ日くまで並木の虫の多いと  
ともももう一月のまるいか月をくも正して坂に時

れすき日も並木のねむづくは風の冷し一月

八十七多川の東西入り口のゆく八年計小しき作の並木塚と延

ノリ

あもじのむしにえのひまはくと 人を代

牛馬は馬ある邊の若ひの街いはしきせばの並木塚のあらそ當篇と  
與はのひのこしヌ枝衝坂

八十八多川原とも橋のとくせ有ハシ小オマウカサキトト名

右を少す四

ウシのゆもとてすは旅の次もあま

三冬

八十九山城よりはがこのまにきのを風とくち田をぐ  
のと見ゆは草からりげをましもあきと稀がれてたるはる一  
又こうかと不ものお根を西の河をかー東坡塞をも

まへむ候カタマリかへて食ひよカタマリあひかへてハ東浦塞カボテキと申す  
者あるとうひしてはに取かカタマリに生カタマリそいよカタマリ食ふへる  
八十八日十日齋カタマリ不仰カタマリ血カタマリサ夜カタマリ雨カタマリ御カタマリ門カタマリ大井カタマリと越  
えんすいとえ末カタマリ

アノ原カタマリのあらゆととふりたナ山原カタマリ小りやはると

九十一事カタマリ西カタマリ小山原近カタマリ人カタマリ家造カタマリりふ悪くカタマリ戸カタマリとまもるカタマリつきカタマリご  
多カタマリじこをすばら戸カタマリのくぼよにカタマリこのあすと画カタマリたりカタマリお詫カタマリと  
紳カタマリて風カタマリはやくカタマリまきカタマリと移カタマリ戸カタマリと一遠カタマリ所カタマリ近カタマリ女カタマリの聲カタマリ乃  
風カタマリも戸カタマリとあびカタマリ也カタマリ一風カタマリかうとりカタマリも圓カタマリ机カタマリし今カタマリ切カタマリ乃  
はーと城カタマリてこら城カタマリ不入カタマリとようほカタマリのよカタマリ大カタマリ小變カタマリいたこカタマリの看

枝カタマリを玉地カタマリのみカタマリ きカタマリさカタマリ えカタマリ じカタマリ おカタマリ りカタマリのまれと  
持カタマリて玉カタマリし尾カタマリ山カタマリにいそりて又カタマリ一重カタマリの宮カタマリの七里カタマリ山カタマリ上カタマリと陽カタマリく  
又カタマリ一重カタマリにあはれカタマリはうカタマリ風カタマリはうカタマリよカタマリばカタマリ乃カタマリ争カタマリ又カタマリ一重カタマリ  
そカタマリ大カタマリはすりぬカタマリりよカタマリえけカタマリい戸カタマリ 〔又カタマリ東カタマリ山カタマリを移カタマリ〕

うへー

京カタマリと海カタマリこの總カタマリまでの趣石カタマリハその也カタマリ大カタマリ山カタマリ一里カタマリ海カタマリ水カタマリ石カタマリ  
かう石カタマリのめき潔白カタマリるものカタマリにあへぬ京カタマリの歸カタマリ女カタマリの趣石カタマリ

とえどカタマリ大カタマリ小カタマリやーし

八日カタマリより眞カタマリ海カタマリ小カタマリ孤宿カタマリいそき宿カタマリもくくわを近カタマリ一里カタマリ引カタマリ  
乃カタマリ原カタマリと玉カタマリに三保カタマリ波カタマリとちふれてゆくく江カタマリ入カタマリ

生あきりもくちめは——ゆほ細

卷之二

九士 同廿一日未明小薄曉山之嶺上風急之極  
吹落葉而下也、一望皆是也。方舟中之風也。富士の居所は島  
が見えてゐる。此の風の吹きま歸ともいへり。此は必ずし  
と小云ひかず。予が席へりといふ事も

實あらまじ連れてふものにあて哉  
日くもあきていた

あせり乞ひ地獄のまゝひめも清きあらぎの達をくぐ越え

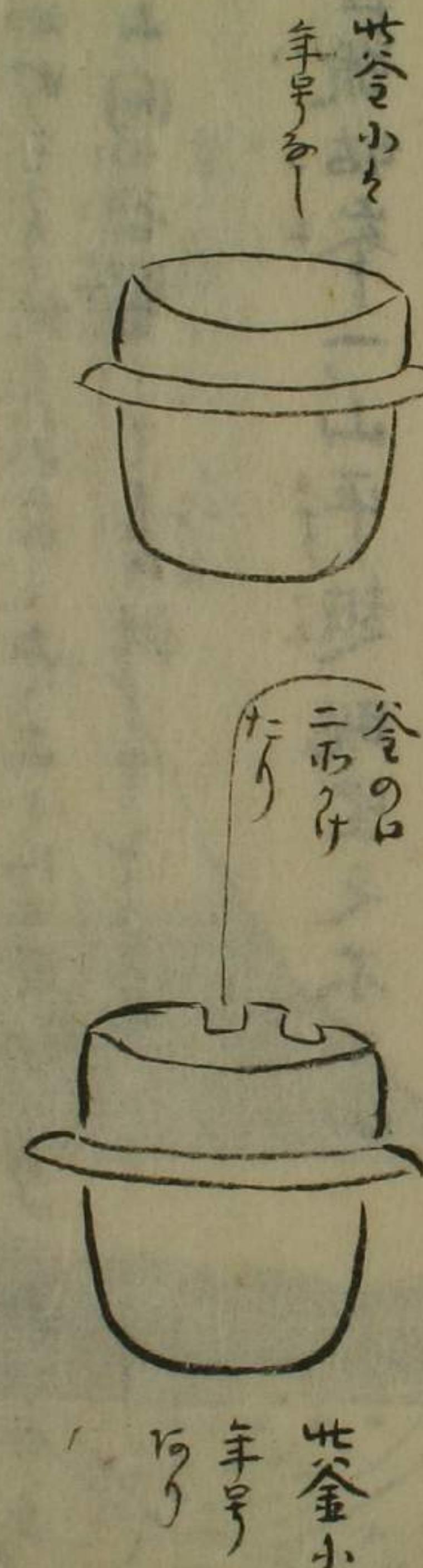
九月去十九日、あいさく、ゆきて次の朝まで、まじめの旅室の焼けたま

たまひやく佐柳のまちにゆきの成小  
まて出て移轉せざり水勢へ向の竹林とえどと茶店  
の花翁ものとれりすへせてもかまにありぬる小川幅

沙門寺  
里の川  
と連れて上  
かほりいとの  
きよし二つの  
町川の移入を  
おもひて

高てむちるに姓は一り、悪く蓮を越え十ヶ川を予東名  
小あつて、東名と名ち、左の川へ向の際、すくて、御所  
えづて五里と隔て天地の変化のめ。

九十五　八月廿二日箱根山と越せ、此をこ詔とちうて、大坂から山道と  
みて、十二里のほど、お宿に次へ、渋んとひざり、夜も二の宿、古  
近ハ宿をくべ、はのくまから、とて、のい、やまと、二の宿、古  
より、追辞とうり、のち、おのづの、うち、か、金あり、文  
文永五年、吉山院、年  
小化るゆふて、東福寺浴室の金も別當法橋位、隆実と  
あり、一つの金た、年足、なる、浴、金れぬち、小汚せたり、何へ  
しまゆに安あひ。



九十六　さいの山原かとある。

る處

箱根山東小もさいの川を御とのいあたのゆにあり  
おゆ乃とすは、西のもの、さいの川を、おゆの地、御堂へとのく  
さくらの宿、  
三 おふくせとみふぢ——兄吉次郎、  
助の、おふくせとみふぢ——思ひ出きて替——千三郎とへあさくま

皆代草トさんとま

もの多くは既に毫末やんとく多至といとか  
は  
ふも清ちよあもとばしもがくて拾ひゆくもかく  
又あきらめかうりきせまいの原は歩あきあ狼の程  
ひてえどもかく西を歟くとる湖水は渴て向かた山又  
たゞとむれとく勑はひくに小石のこ河原もありとのる  
町ぞり地主の堂のこ五ヶ所からりて船のまゝ湖水のまゝ  
山洞小谷聳へてもの休へてどまむ

九十七 貌姑峯一山平越眺望之不二山



首西挺のりとて

多天少て一日もせ山

尼八月ぬく小主て乞例

多原古原の吉久が全取乃

田ドとえざると恨ミシムニ

宿根と越むる一の山乃多ア

川原近三里しののち不ニてなう少しして

ゆは昔岐情只山腰少一草の白雲ありて

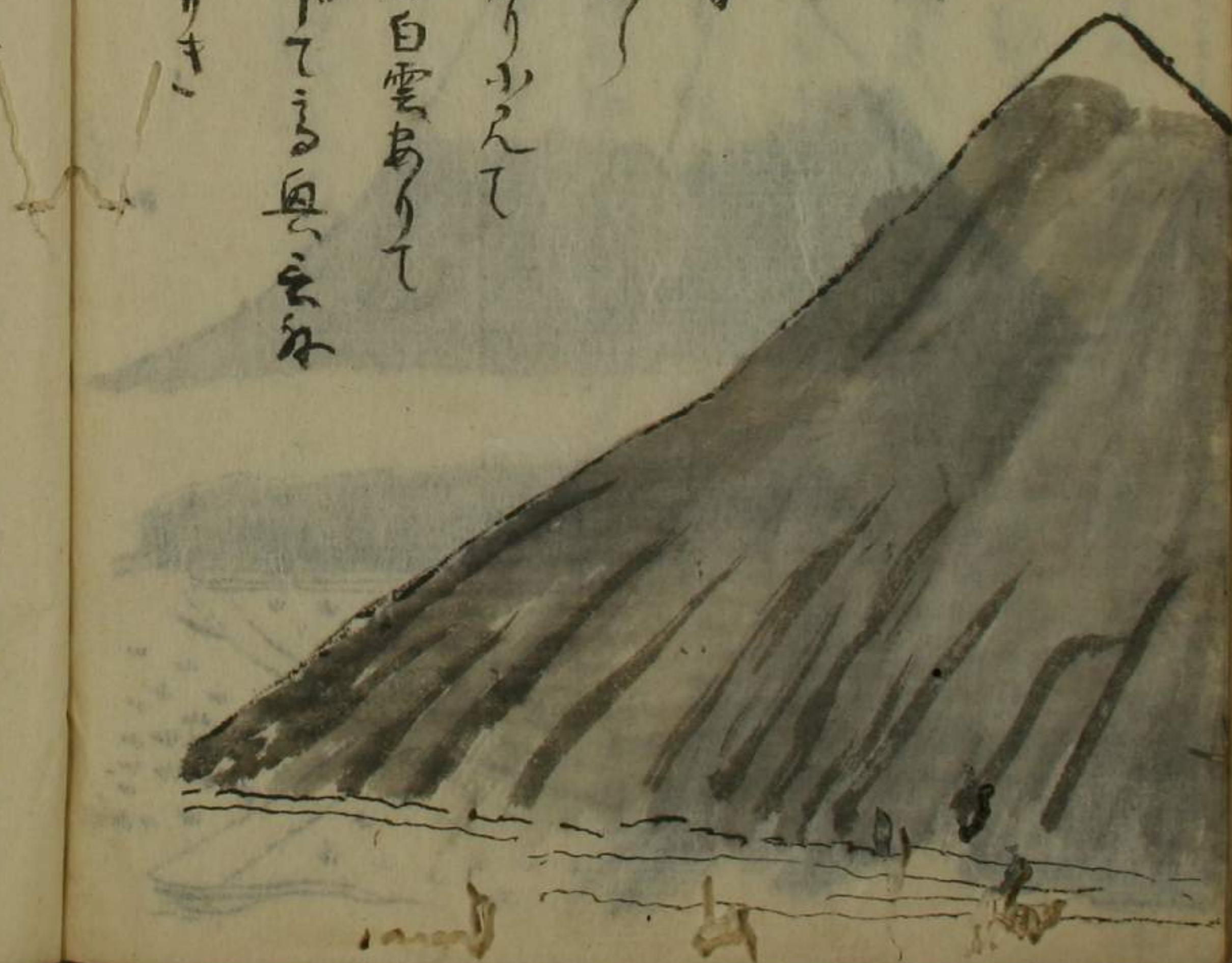
画る如くあり山上少々旭映ドてゐる風云々

暫時旅人の足とぞぞえーとす

九十六

○

石根三枝桜のあらア斗小滝うわまく小ゆをけ落除丁  
場の傍示板ありせ構ハ三尺斗の石と立木枝ミテ桜木ハ  
もう三枚目つる小名馬つ蹄跡ミテはよアヒトのひだら  
のめー夫人の日もー萬あら席時致駿馬小滝うて山とあは小滝  
倉より使れ身アサ不生行合日時致駿馬と石桜のまたもしおは  
駿馬右足と左足と踏かゞり、ゆきアヒトの附馬蹄石小入る  
五六十人今すともの黒人せると踏車と見る爰少人有て伴  
の石とれて陽の石とさへちにそね死し人等とく  
又えのめくさうヒー脚乗と歩する者をせ石小折取すと  
忽然と愈とりよ病し常に傷のあは不帰香のぬきこー



アリ是ハ新取の人朝々く保香と立ておせりうとりえり

五月十日大残小宿ナリハ日せりにテ候少しきりて又美少じ候

大残ヤ虎ノあはれの木にて候もうはの木ハ候ドリ

九月八月廿日大残とちうて川崎に泊る。今日あはれ行幸岡山を  
少て遠近の村支児名治野縣一キ内小角ケ原ノリヒーが

立モリ又ナホトハ馬場の花若也學モハムクヘ

松り三ヤササハトヨウシ柳

三尺

サニテ川崎小旅宿ナシ。あ路ナシでに遠ノレ候。さす

小村の夜未アムと清らびく

ミラーミヤレ戸小障子一枚

三枚

四

壁ミハサナモヤクレ戸小入思多岐すてにちは壁ナバにモリ  
のよけふ神にモリはま入門ナリア生て候。ひらえケル百害日  
の旅リ小鳥の者一日も病ナシテモ又旅中いよくモリマサ

ナリ

風モモギヒモリケモふくモ田舎ナリ戸ヘニシテの

旅モタマシキ

三尺

石ハ有ナリ戸ガ立くハ日廿四戸に満。廿日板百有  
五日越歴廿四戸武兵相模伊豆強河遠江三河尾西  
伊勢近江山家山内御用。印鑑。余。圓。

享和二壬戌年八月廿四日施筆  
同十一月朔日校合畢々

曲亭山澤解戲記

附錄

四二

一旅少て少々し無きもア  
貪りて飽車を以ぬれ人  
むとリ旅とすてけまぢし宿引  
名ふと云はば日乃風雨  
一旅少て少々し無き車　十一ヶ除  
續といへて自タ川井も車  
川越の駕籠も料と班也ハ近人の業社と  
曰ふべ一病愈て後革代と價ゆる  
ま盡つまく思ふ常子也と命と今下せ

シモトニシハ今後■らう措ひへき川よりの  
賢又レのル一市命と約束の債とをもひて  
カレシモモモト一近江宿根三段協かて  
僅拾六又ラ儀と惜みて或武家の付足性  
忽ち命と失いちよよー鳥根山中の人

カナセリミハ八月十六日の中の事

一川留小退屈して密小留川と趣全ノ代  
一近江としりて狹小船アキ延

セキセキ陸地小は未だと損失少ニ逢ニ阿湖の道  
シテトヨア勤員からて命と失ふ人多ア筋中

二十一

一連歩き旅をゆどかにて早くあますべ

船を下しやへ出でタバもやくゆよー船とまき

石をうづりとみしめ、とまはるの損あり  
一水とのもつゞ木のよ頼むべてやくときへ言あとく  
ふ極

一旅中ハ悉く歓せとちうかーもゆりすべ

かまてに勇まとえをしてうち■柔ねじまへ一休  
まごし物とまやんれかうべんえふよせ主金

スイドホリシモ後妻女とソノヘーベカ一

怠慢と生——サニハ瘡毒のじきに急慢と生ま  
自然筋肉が失ひやすくなはむ——

一馬——ま革鞋もとやく脱る——

——トドハ價と——まだ逃げて——  
羊飼ハ旅人の甲冑——トドハ走りて——  
木立——歩き一步し運——

——至の令事ハ——ニ度り食ひテ腹小アハ武座もウツ用  
カ——大食とモモドクシヒジ部

一小休の時オニアトミソワク——ト三度ノ留え——ナ席と  
ナ室——引腰モハ妙とモモド

——とどき間を立場するに令人足ハ若とつはきノ事  
出ひ立候トドトムアモタハナムハチシアトミソワク  
ミモリテトヨシテモ白日の筋中ホキモモニヤモ哉  
——モリ空——ハ失ひぬれをかす——アソシ半ト  
ハモウビテルホナト——トキモバーリキモテナカハ  
ア早——ヨリナシモトサ凸凹と踏——モモト所要  
リは

一夏の旅——馬未安ベ——

夏の暮——蠅ホムシ故と云ふ荒——人——  
睡眠と伴るもの——然——夏日未安モ多々人

多一

一業卧て馬ふさぎを損失あらず

ぬか駄毛てるふあるくふうは損失馬もまも駄の駄  
おへー駄ハ價も安ー至とより後泊の駄に近  
きとハ足のこび自然小旱もしくもじもア  
トヨリ駄の内足底をすみせをもとま駄別小  
一立日ヒの用小立駄一立ヒトモウシテ  
モウテ足の足のものし仰るに法である所を嘗  
てありしと見る余異不一と鞍上穩ううる  
らし

廿記世小もかる屋表神のなまかふーもゆゆりて窓外  
にぬるよーとひと邊曾書肆の向いがほよ修小もく  
て廿記の中ねケ除と抜萃して別小冊。蓑笠雨綻と  
名付て刊布アリ以下ハナビ人のえも身仲許さん後も又かく  
て有るべー我よ仲許さんとほよもひくもく許れ  
ふとかと

壬戌西鶴旅漫錄序

四二

男ふあひりてハ未見の書籍と聞んすといもひ旅  
りて未見の山川不ねぐ半ともよどまつてふち

かくす年中 宽政庚申 三拾四年九月 院豆相  
の方を北歴山川九月吉レアと登之先武内大臣久と北行  
にて浦望の友と防い豆サト田小崎相行難三十四里  
一日効風小崎て山岬小崎は九月ト向ハリモリテト田乃  
倭小崎の平十九斗ノ序所達甚至寺の温泉小治し  
天城六里の山中と越天城山中六里  
る人あれり 仰方すま小猿窓  
三浦治ほの朋友と沿山て相め石子木小いさり枝としの多  
津倉小曳くやう十五ノアルニスは未石余里始所獨行  
きり木多ノ一木あり向は木也ウルシナ付木もアヘニ  
年あ半未だノ木多木也獨行

之が今より少し宋の文章に面白の得點を  
付す。一年が極くうまい。命と時とをもつては、  
との如脚と見る。久く洋語のうちに沈没し

人生宇宙間志願苟不  
萬里，終即讀一萬卷書。

壬子和二壬戌年冬十一月二十六

著作堂曲亭馬琴再識

康倉十橋

琵琶橋

鶴後橋

奇橋

勝つ橋

載許橋

計磨橋

夷堂橋

亂拂

逆川橋

主堂橋

天台山

月十井

共字空保たま

一ノ月亭の小山といひすゝ木の名を花あらの天井の東山

六角井

株立の井

瓶の井

法の井

扇の井

底枝の井

泉の井

星月夜井

石サ

水ヶ瀬川

嘗ては嘗ては長谷のあへ出で未だあるとて流下入る

渭川

土佐稻川とよ

山上の胡桃の谷より源を出でて秦川とよ

狩後川

野は尔や追一の東山浦の入品を抜くと

一万葉

望不盡山放<sub>アシテ</sub>短歌

山部宿赤人

天地之合時從神在備手高貴寸駿河有布士能高嶺  
乎天原振放見者度日之陰毛隱比照月乃光毛不見  
百雲母伊去は伐加利時自父曾雪者落家留

ト

語告言繼將往不盡能高山嶺

返歌

田兒之浦促サ出ス凡者真白衣不盡能高山嶺原雪波  
零家留

同

不盡嶺雨零置雪者二月十五日消者其夜布里家利  
卒返歌六首アリ

三阿計

附言

此原本山冊漢字若干ハ一文面脱落あり或ミ詰合の  
地名など悉く予解り補い児女のえすをめん為小豆く  
に假名と號を投合一至のを書に付撰僻業の況あま  
トまで予評と加て之を世ふては半と載候ど  
彼子に他と評すぬ——とあ殊るに命一五もの也

文化十六四年十月 白堀道人十方庵大師法

大倉  
二七

三月

日記

